



八百万の道



導命家という生き方

導雲

目次

前書き

「第1部 導命概論」

根源生命、造化の七神、DNA、地球系DNA、ヒト細胞、総命の体内、二重螺旋のたすき、多元生命体、ヒトの夕暮れと新種人の夜明け、生命の潮流、神劇、御魂人、導命と導命家

「第2部 心」

内なる光明、自己像を形成する、苦難とは心の鍛錬、生みの喜び、心の三層、心を整える、身体感覚を鍛える、経験と認識、愛すること、一日をしっかりと生きる、小さな幸せに感謝する、自律と自立、高貴、本性、清濁併せ呑む

「第3部 指導者」

種の恐竜、自浄作用、資源の獲得、導命分析、部分と全体、戦争と平和、人間食物連鎖、志、命を大切にする、闘争、組織と指導者、民主政治、統治能力と政府、支配について、民衆、戦争という生理現象、創造と破壊と成長、富と権力、導命と平和、指導者の心得、弱者救済、文化経済圏

「第4部 役割」

時代を創る者たち、天才秀才そして凡才、役割や仕事に邁進する

「第5部 処世」

欲望の大河、歴史という物語、食事、世間、善悪と利害、善意と悪意、歴史との付き合い方、時間、希望、人生と云う名の戦争

「第6部 美について」

地球の美、人生と云う名の芸術、美について

「第7部 恋愛・結婚」

魂と魂の交感、恋愛と結婚、人工子宮と未来の話

「第8部 人間絶対主義」

人間絶対主義者と環境主義者、導命駅伝

「第9部 未来からの言葉」

新種人の言葉、御魂人としての自我

「第10部 指導者としての導命家」

日本と導命家、導命家へ

後書き

前書き

あなたは宇宙に散在する数千億個の銀河の一つである銀河系の中心から約2万5千光年離れた場所に位置する太陽系第3惑星地球の地表面に棲息するホモサピエンスです。

そのあなたに質問をしましょう。

素粒子の如き地球の地表面に突っ立つ微生物としてのホモサピエンスに如何なる存在意義があるのか。

何の価値があるのか。

そのようなホモサピエンスとして生きること何の意味があるのか。

宇宙の観点で眺めれば、自殺も大往生も同じではないか。

隕石と隕石が衝突すること、通勤電車と自殺者が衝突することは同じではないか。

隕石が衝突して数百万人が死亡すること、核兵器を使用して数百万頭のホモサピエンスを殺害することは宇宙の観点で眺めれば同じではないか。

満員電車ですし詰めされてまで働き続けることに、この宇宙の中で何の意味があるのか。

家族を養うため？何のために家族を養うのか。

家族を養って何になる。

子供の成長？それがこの宇宙の中で何を意味するのか。

経営者と執行部は社員を奴隷のように酷使して株価の時価総額を世界一にまで高めようとするが、それに何の意味があるのか。

資本家と政治家と軍人は利潤を得るために国と国の対立を偽装して万民を死地に追いやるが、それは大宇宙の中で何の意味があるのか。

国を守ることの本当の意味は何か。社長になり時価総額世界一を目指す根本的な意義は何か。

国会議員になって国を守ろうとする根本的な意味は何か。

上司にゴマを擦り同期を蹴落とし部下を抱き込み家族を犠牲にしてまで出世した根源的な意味は何か。

資本力と政治力で地球政府を作り、統治権を手に入れたとしても、それが大宇宙の中で何を意味するのか、如何なる価値があるのか。

我らの生涯は生きるに値するのか。

何のために命を授かったのか。

なぜ存在しているのか。

何のために生きるのか。

結局、私たちは、この宇宙の中で、何をやっているのか。

あなたは答えることができるでしょうか。自問してみてください。自分は何者なのか、今の仕事には如何なる意味や価値があるのか、と。

すぐに答えが出る人、答えが喉元につっかえてなかなか出ない人、答えは出ても自信がない人、答えは分からないけど興味がある人、何も思い浮かばない人、全く興味がない人など、じつに様々だと思います。

本書は、そうした全ての人に向けて書いています。たとえあなたが自分の存在価値に興味がなくとも、本書を一度読んでみて下さい。読み終えた後は、全く違う自分自身に出会っているはず
です。

では本文に入る前、もう一度あなたに質問しましょう。

結局、あなたは、この宇宙の中で、何をやっているのですか？

根源生命

私たちが存在している森羅万象の世界は、ある一つの生命体から生じています。

それが「根源生命」です。

全てはこの偉大なる生命体によって生み出された生命現象なのであります。

宇宙、銀河、ベテルギウス、太陽、地球、ヒマラヤ山脈、高層ビル、茶碗、ノート、温度計、私たちの肉体を構成している素粒子、素粒子を素粒子たらしめている法則、肉体が存在する空間、人生に変化を与える時間、私たちの人生を充実させる力、宇宙の生成、銀河の衝突と融合、ホモサピエンスの戦争、生物の生と死、男女の出会いと別れなども、須らく根源生命の生命現象なのです。

根源生命の存在を知りたいときに、天を見上げる必要はありません、外に視点を向ける必要はありません、内側に意識を向ける必要もありません。

ただ静かに、根源生命を思うだけで充分なのです。それだけで温もりに触れることができるのです、光明に浴することができるのです。

なぜならば、私たちは存在そのものが、根源生命の一部だからです。

造化の7神

根源生命から誕生した原初の生命体は、森羅万象を司る神々です。

時を司る神、物質を司る神、次元を司る神、法則を司る神、空間を司る神、生成を司る神、消滅を司る神の7神、すなわち「造化の7神」です。

造化の神々はまず初めに、多次元生命体を創造しました。

そして、1次元生命体や10次元生命体など様々な命が生まれました。

そうした各次元生命体の中の「4次元時空生命体」、それが私たちの宇宙です。

宇宙は生命体なのです。

ゆえに私たちは、宇宙生命を構成する細胞の一粒であり、さらに次元を上げて眺めるならば、高次元生命体を構成する諸要素の一部となるわけです。

私たちに意識があるように、多次元生命体と宇宙にも識があります。

多次元生命識と宇宙識です。

私たちの肉体が宇宙生命を構成しているように、私たちの意識もまた、宇宙識の一部を構成しています。

意識とは脳細胞の発する電気信号の統合体ですから、私たちの意識は宇宙識の幾億ある電気信号の一つと言えます。

私たちの生死とは、宇宙の呼吸がもたらす、宇宙細胞の一瞬の明滅なのです。

私たちの意識と身体感覚を地球全体にまで広げれば、地球と一つになります。

銀河系全体にまで広げれば、銀河系と一つになります。

宇宙全体にまで広げれば、宇宙と一つになります。

多次元生命体にまで広げれば、多次元生命体と一つになります。

そして根源生命にまで広げれば、根源生命と一つになるのです。

この宇宙の中で、私たちはバラバラの存在ではありません。無関係ではありません。

タンポポも、マンボウも、人間も、地球も、月も、太陽も、ベテルギウスも、地球から100億光年離れた先に浮かぶ惑星も、全ては有機的に結合しているのです。

DNA

造化の神々は宇宙を創造したあと、DNAを作りました。このDNAは私たちの身体を作っているDNAではなく、原液や原本に相当する原DNAのことです。

神々は原DNAを用いて高知能生命体を生み出しました。

その後、高知能生命体は、自分たちのDNAを基に下位種のDNAを作り、宇宙空間にあまねく播種しました。

その中の一つが、私たちのDNAである**地球系DNA**なのです。

人間の脳神経と宇宙の図は驚くほど似ていますが、これは当然と言えば当然です。

なぜなら、神々が宇宙と同じ生成原理に従ってDNAを作成したからです。

私たちは、宇宙における偶然の産物ではありません。

神意に基づいて創造された地球系DNAの被造物なのです。

さて、地球系DNAの機能や役割は、次の4つに大別されます。

- 1 設計図
- 2 遺伝情報を記録する
- 3 生命識から遺伝情報を受信する
- 4 遺伝情報を生命識に送信する

生命情報は二重螺旋に記録されているだけでなく、地球系DNAの生命識にも集積されています。

例えば受精卵が細胞分裂を開始すると、地球系DNAは自身に記録された情報だけでなく、生命識から取り寄せた情報を組み合わせて生物を作り上げます。

そして生物が成長する際の個別情報を地球系DNAの保管庫に送信し、子孫が変化させるべき部位や継続すべき形質などを保存するのです。

高知能生命体が播種したDNAは地球だけに限らず、銀河などに広く分布しています。

私たちのような惑星系DNAは、それぞれの星で独自の情報を蓄積しながら拡大しています。

そしていずれは融合し、宇宙にまたがる巨大なDNAネットワークを構築するのです。

《1 進化の方向》

私たちを含む生物は地球上のみならず地球外にも存在しています。深海に棲む微生物からISS（国際宇宙ステーション）に滞在している宇宙飛行士などです。この分布は、ダーウィンが唱えるまでもなく、40億年の進化によってなされたもので、一夜にして現れたわけではありません。

さてその進化ですが、単に生物の生態構造が変化するだけではありません。ここでは、進化の方向性にも注目していただきたい。

魚類、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類。

海から陸へ、陸から空へと、常に地球の中心から宇宙に向けて、DNAは生物を作り続けているのです。そして幾万種の中の一つであるヒトは宇宙へ行き、ISSを建設して生活をしています。

つまり進化の方向性とは、宇宙へ向けての拡大なのです。

そして、環境に応じた種を生み出すことで、分布範囲を広げているのです。

次は、類や種の旧→新について述べます。

生物は魚類から両生類が生まれ、両生類から爬虫類が誕生しました。

ここで着目していただきたいのですが、魚類から両生類が生まれたからと言って、全ての魚類が両生類になったわけではありません。魚類の一部がDNAによって形態を変化させ、両生類になったのです。爬虫類の場合も同様であり、彼らは両生類の一部から生まれました。

進化は、類や種そのものが変化するのではなく、その一部が環境に応じて形質を変化させ、次の生物集団となって繁栄し、その一部から新たな集団が誕生するのです。

以上を簡単にまとめると、

- 1 DNAの方向性は宇宙に向けての拡大である。
- 2 外部環境が変化すれば、順応可能な種を作り出すことで繁殖を可能にする。
- 3 進化は、類や種の一部が新たな環境に挑戦し、適応することで実現させる。

これらの条件はDNAの被造物であるヒト種にも適応されます。

宇宙飛行士を筆頭とした宇宙開発関係者たちこそが、まさにヒト種から飛び出した一部であり、

未知なる環境＝地球外空間への挑戦者と言えるでしょう。

類と種の違いはあれども、彼らは、魚類から飛び出し両生類の礎を築いた挑戦者、両生類から飛び出し爬虫類の基礎を固めた挑戦者に匹敵する、生物史に名を刻む存在なのです。

《2 総命》

40億年前に誕生したと言われる生物。住んでいる場所も生体構造も、実に多種多様であります。そして深海魚、マンボウ、馬、縄文杉、人間などの生物は、すべて地球系DNAが作っています。よって地球に存在する全個体及びその構成要素は、

地球系DNA（線虫＋大腸菌＋ショウジョウバエ＋マンボウ＋タンポポ＋心臓＋上腕二頭筋＋日本人＋フランス人＋etc）という式で表せます。

ここから何が明らかになるのでしょうか。それは、地球系DNAによって作られたミトコンドリア＋心臓＋背骨といった細胞・組織・器官の有機的な組み合わせによって人間が成立しているように、地球系DNA（マンボウ＋日本人＋フランス人＋etc）もまた、有機的に結合した細胞・組織・器官によって成立する**巨大な生命体**という事実なのです。

それでは、地球系DNAに反応する光線を地球に向けて照射してみましょう。深海の微生物から国際宇宙ステーションの乗員までを含む、一つの巨大な生命体が見えるはずで、これが、地球系DNAの本来の姿なのです。そしてこの生命体を「総命（そうみょう）」と呼びます。

総命は根源生命、宇宙生命の構成要素であり、総命独自の識である「総命識」を持つのです。総命の全体像は、地球周辺に限定されません。地球系DNAの分布する範囲全てが総命なのです。

火星までなら火星を含めた範囲が、太陽系なら太陽系が総命の全体と言えるのです。

総命を球根に例えるなら、ちょうど出芽に差し掛かったところです。

今後、総命はさらに成長し、地球の花を咲かせます。

やがては花粉を飛ばし、他の惑星系DNAと融合し、新たな系統の花を咲かせるでしょう。

《3 種器官》

人体が様々な臓器や器官で構成されているように、総命もまた、様々な要素によって成立しています。この場合、臓器等に相当するものが、類や種などの生物集団であり、それぞれの特徴に基づいて、総命内での役割を担っています。

ヒト種もまた一つの器官です。これをヒト種器官と呼びます。

ヒト種器官は総命の一部ですが、同時に一つの生命体でもあります。

ゆえに脳や肺に該当する器官・組織・細胞を有します。

民族、国家、政治結社、宗教共同体、企業などヒトによって形成された組織や集団がそれらに該当します。

以上の観点から人間の社会を眺めてみましょう。

私たちが属するヒト種器官は、インターネットの出現によって新たな神経網が張り巡らされ、器官内の情報伝達は広範かつ緊密となりました。その結果、私たちヒト細胞は、大規模な情報を同時期に共有することが可能になりました。さらに、日々生み出される幾億の情報を、脳的組織が統括することで、以前に比べてより一層、一つの生命体として機能するようにもなりました。新たな生体機構を獲得したヒト種器官は、今もなお進化を続けているのです。

《4 進化とは総命の成長》

生物が成長する際は、まず細胞や組織が変化します。

ここで、生物の全体像ではなく、細胞と組織における変化の連続性に着目すれば、それは進化と呼べます。

そして全体の視点から眺めれば、それは生物の成長となります。

個体で見ればそれは変化であり、部分で見ればそれは進化となり、そして全体で眺めれば成長と呼べるわけです。すなわち、一個にして部分にして全体なのです。

ヒトの進化もこれと同じです。

ヒト種器官だけに着目すればヒト細胞の変化は進化と呼べますが、全体の視点で変化を眺めれば、ヒトの進化とは総命の成長なのです。

総命にとってのヒトの進化は、40億年続けてきた成長の一過程に過ぎません。そして今は、ちょうど出芽に差し掛かった段階です。

前項でも述べましたが、ヒトの進化の最先端は、宇宙飛行士を筆頭とした宇宙開発関係者たちであります。ただし、まだ完全には進化に到っていません。今後、彼らが進化を明確に意識するようになれば、彼らの脳とヒトゲノムに変化が生じるでしょう。

やがて彼らの血統は総命の新芽となって成長し、総命は萌芽の段階へと到ります。

それによって、ヒト種器官と総命は、本格的な進化、そして成長の段階へと進むのです。

《5 ヒトの役割》

ヒト種は総命を構成する器官なので、当然固有の役割があります。

それは何か。

「地球系DNAの生存圏を地球外にまで拡大すること」です。

前項で述べたように、DNAの拡大方向は地球外であり、ヒト種だけが自発的に宇宙空間へ進出できます。私たちが有するこの能力は、生命の流れと一致しているのです。これはすなわち、総命内におけるヒト種器官の果たすべき役割を意味しているわけです。

では、役割の具体的な内容を見てみましょう。先ほど「生存圏を地球外にまで拡大すること」と言いましたが、これはつまり、地球外でも繁殖可能な環境を作り上げること、すなわち地球外共同体の建設を意味します。

地球外共同体とは、その地で暮らす住民が結婚、妊娠、出産し、生まれた子らがそこを故郷として成長し、学び、恋愛し、新たな家庭を築き、子を儲け、教育し、その子がまた同じく成長できる環境を指します。そこでは地球外独立政府、自治体、企業、学校、病院、公園、商店街、競技場、歓楽街等が設けられ、地球外の独立した文明圏としての役割を果たしているのです。

この共同体の存在意義は、DNAの拡大に寄与するだけではありません。生存リスクの分散にも貢献するのです。

地球で大規模な災害や人災、例えば大噴火、大地震、地球規模で蔓延する疫病、そして全面核戦争などが発生し、地球人の文明が壊滅しても、地球外共同体の人々は文明を保持しているわけです。さらには地球のヒト種が地球のみならず宇宙から消滅しても、あるいは地球が木っ端微塵に砕け散り文字通り滅亡しても、地球外共同体が存在しているので、地球系DNAすなわち総命は生き続けることができます。

人類のためではなく、総命のための宇宙開発こそが、ヒト種に求められているのです。

ヒト細胞

人間は、ヒト種器官を構成する細胞です。宇宙の中心でも地球の支配者でもありません。ヒト種器官は、それ自体が一つの生命体なので、脳や心臓に相当する部位が存在します。

それらの部位は、脳的細胞、心臓的細胞といった各種人間によって構成されているのです。

脳的人間は、ルールを定め、物事を大局的に判断します。政治家などの指導者です。

白血球的人間は、異物に対して戦闘的に対応します。軍人や警察などです。

生産的な細胞、例えば造血細胞やミトコンドリア的な人間は、金銭や物を作り出します。商人、農民、職人たちです。

では、幕末の人物や組織を通して〇〇的な性質を説明しましょう。

1 脳的人間

大久保利通と坂本竜馬です。彼らが脳的である理由は、幕藩体制後の統治機構図を明確に描いていたことです。殆どの侍、特に討幕派の志士たちは、幕府を武力で倒した後、どのような統治機構を持つのか、それはどのような理念に基づいているのか、といった具体的な青写真を持っていませんでした。しかし大久保と坂本は、其々の理念と海外に関する情報を基に、其々の機構図を描いていました。坂本は途中で凶刃に倒れましたが、大久保は内務卿として独裁的な権力を握り、富国強兵の理念の下、官僚機構、徴兵制度、廃藩置県、徴税など具体的な国家作りに着手しました。

2 白血球的人間

新撰組のお歴々です。彼らは、京の治安を荒らしまわる討幕派や脱藩浪人たちを取り締まるため、京都守護職の会津藩が設立した「武装警察隊」です。主な任務は治安の維持、つまり幕藩体制という生命体を、討幕派から守るための免疫組織なのです。徳川幕府にとって、討幕派の志士たちは幕府要人を暗殺するなど、ウイルスに等しい厄介な存在であり、そのウイルスを討伐するのが白血球としての新撰組でした。

3 ミトコンドリア的人間

戦争に必要な物資は主に武器ですが、軍資金も大切な要素です。軍資金は、戦争遂行のためのエネルギーと言えるでしょう。人体の場合、このエネルギーはミトコンドリアによって生産され、幕末では裕福な商人によって生み出されました。

例えばそうした商人は、下関の豪商、白石正一郎です。

彼は討幕戦争遂行のための潤沢な資金を高杉晋作や奇兵隊、その他の志士に提供し続け、明治国家の誕生に貢献しました。

人間や組織もまた、人体同様の役割を果たしていることが理解できたと思います。

人間である限り、必ず〇〇的に該当するので、自分は何だろうか、と思いを巡らせてみるのもいいでしょう。

就職を控えていたり、転職を考えているならば、適切な職業が見つかるかもしれません。

さて、〇〇的人間、の中で最も忙しい部位は「**脳**」であります。

人体でも脳が大量のカロリーを消費するように、脳的人間は各種人間の中で、もっともエネルギーを消費します。

そのため、脳的人間に人材、富、情報、物が集中します。

脳的組織ともなれば、その傾向はより一層強まるのです。

これは生物学的必然、生命の掟、宇宙の法則です。

むしろ、脳的部分にそれらが集まらなければ、適切な判断は下せませんので、生命体そのものが不利益を被るでしょう。

もしあなたが脳的人間として活動するならば、全体的な視点と包括的な判断基準が求められます。

それは例えば、ヒト種器官に貢献しているだけでなく、総命の成長に寄与しているか否かも同時に考えることです。

この世には、ヒトやヒト種器官にとっては有害でも、総命の成長にとっては有益と言える行為も存在するのですから。

総命の体内

ヒトは、総命という巨大な生命体を構成する細胞です。

巨大な生命体と言っても人間の視点での話であり、宇宙や銀河から見れば、総命も細胞といえます。

地球系生命体の細胞である私たちは、当然、その体内に存在しています。私たちが当たり前眺めている山川草木海空の豊かな自然風景は、総命の体内そのものです。

これは、都市にも当てはまります。

ニューヨークの高層ビル群も、ローマの街並みも、何もかもが体内の姿なのです。

私たち人間は‘自称’高等生物ですが、あくまでもそれは人間の視点に基づいた評価であり、ある意味では自画自賛、自我肥大とも言えるでしょう。

人間ではなく、総命の観点から私たちの社会を眺めれば、人間の生活も燕の生活も蜂の生活も大差はないのです。

DNAの被造物であるヒトが高層ビルを建てれば、それは人工物です。

DNAの被造物である燕が巣を作れば、それは**燕工物（えんこうぶつ）**です。

DNAの被造物である蜂が巣を作れば、それは**蜂工物（ほうこうぶつ）**です。

総命にとってみれば、ヒトの建てたビルも燕と蜂の作った巣も、被造物の被造物なのです。

他の動物と違って道具が作れたり読み書きができるからと居丈高にならず、細胞としての自覚を持ちましょう。そして、次の言葉を肝に銘じましょう。

「わたしの視点は、ヒト細胞のミクロの視点である」

二重螺旋のたすき

DNAとは二重螺旋のたすきです。

40億年前に第一走者がスタートして以来、数多くの走者が後世にたすきを伝えるべく走り続け、現在の走者である従来型ヒト種にそれは繋がりました。次は、ヒト種が未来へたすきを繋げる番です。

ヒト種以降のコースは地球外が主要な舞台となり、これまでとは異なった環境となります。

海では海的环境に適した走者が、陸では陸的环境に適した走者が走ったように、地球外では地球外的环境に適した走者が担当するべきです。ゆえにヒト種の次の走者は地球外での生活に特化した新たな種が担い、ヒト種の役割は新たな種を生み出すこととなります。

新たな天体に移住する種はヒトでなくともよいのです。

むしろ地球外への移民を目的とした新たな種を生み出し、彼らに宇宙の開拓を任せるべきではないでしょうか。ヒト種は地球での生活に特化し過ぎているため、やはり地球で生を得て地球で死を迎えることが自然の理となります。

今後はヒト種に拘ることなく、総命という全体的な視点に基づいてDNAの存続を検討すれば、自ずと道は開けてくるでしょう。

多元生命体

民族、国家、企業、思想集団などの、ヒトによって形成された組織や集団は、それ自体が一つの生命体なのです。

例えば民族は民族次元生命体、国家は国家次元生命体、そして企業は企業次元生命体と言えるでしょう。

私たちの社会は、これら次元生命体の重層的、複合的な組み合わせによって豊かな生命活動を営んでいるのです。

ヒトは必ず何らかの次元生命体に属しており、例えば会社員なら、国家次元生命体の細胞であると同時に企業次元生命体の細胞でもあります。このように、肉体の生命のみならず、自分が所属する次元生命体もまた、その人にとっての生命なのです。

例えば軍人、警察、消防、そして防災関連に従事する人が、己の職務を遂行する過程で命を落としたとしても、その尊い犠牲によって国や地域が生き延びたならば、肉体の次元では滅んだとしても、国家次元、地域次元生命体として生き続けているわけです。殉職者のための慰霊祭は、彼らが「かつて存在していたこと」を思い出すためではなく、彼らが「それぞれの次元生命体として生き続けていること」を確認するための儀式なのです。

ここまでは有形物を対象に記してきましたが、次元生命体の対象は無形物も含まれます。すなわち精神的な事柄や概念もまた、一つの生命体なのです。例えば思想や名誉などがそれに該当します。

その一例として「名」を挙げてみましょう。
つまり「名」という生命体です。

戦国武将の辞世の句には、「名」を生かすという思想が刻まれています。

浮世をば 今こそ渡れ武士の 名を高松の 苔に残して 「清水宗治」

名のために 棄つる命は惜しからじ 遂に止まらぬ 浮世と思えば 「平塚為広」

五月雨は 露か涙か不如帰 我が名を上げよ 雲の上まで 「足利義輝」

夏の夜の 夢路はかなき後の名を 雲井にあげよ 山ほととぎす 「柴田勝家」

これらの句が生まれるのも、「名」を自分の生命と見做しているからこそです。戦国武将の意識には、肉体の生命と名の生命が常に存在していたのです。

有形物、無形物の生命体について簡単に説明しましたが、もしあなたにとって、肉体の命と引き換えにしてでも守りたいものがあるならば、それこそが、あなたにとっての「本当の生命」です。大切にしましょう。

最後に次のお話をしてから本項を終わりたいと思います。

この日本もまた生命体です。縄文時代から現在に至るまで、様々な統治機構、すなわち生体機構を辿ってきました。その中で最も巨大な生体機構の変化は明治維新です。西南戦争というアポトーシスの戦争を経て、中央集権国家に到達しました。第二次世界大戦の敗戦後はGHQによって生体機構を組み替えられ、日本国という名の共同体に生まれ変わりました。

今後は、新たな環境に適応した生体機構を獲得するでしょう。

それはすなわち、日本という生命体の進化なのです。

ヒトの夕暮れと新種人の夜明け

現在の地球系生物は、地球以外に住むところはなく、この小さな天体と一蓮托生の運命にあります。

しかしいずれは、地球系生物によって地球外共同体という新たな生存環境が建設され、地球から完全に独立した文明圏が誕生するのです。

まさに生命の飛翔であります。

この力強い羽ばたきは、決して従来型ヒト種のみによって達成されるものではありません。

むしろ、ヒト種の次に誕生する、より優れた種族が、その大役を担うのであります。

地球外へ向かう一連の過程において、従来型ヒト種を母体に新型ヒト種が生まれます。

そして新型ヒト種から、新たな種の「**新種人**」が誕生するのです。

彼らの登場により、従来型ヒト種、つまり現在の私たちは殆どが無力になります。具体的な能力差はわかりませんが、洞窟で暮らしていた原始人と高層マンションで生活する現代人程度には格差があるように思えます。

では、新しい生命体の特徴について簡単に記したいと思います。

「新型ヒト種。新しいヒト」

彼らは放射線への耐性が従来のヒト種よりも強い。特に胎児期～幼少期にかけて顕著に差が出る。DNAの修復能力と耐久力が格段に高いのである。大脳が従来型ヒト種よりもはるかに発達している。抽象的な思考、直感、数学力、論理構成力、情報処理能力などは、従来型ヒト種を凌駕する。より精緻に、より大局的に、より果敢にヒトや生命の歴史を把握し、独自の解釈を下す。

「新しい種。新種人」

放射線への耐性、大脳の発達新しいヒトをはるかに凌駕する。従来の五覚、つまり視覚聴覚嗅覚味覚触覚に加えて、**第六覚**を獲得している。

その**六覚**は、従来型ヒト種や新型ヒト種の脳では捉えられなかった靈妙なる存在や現象を、当たり前前の存在として把握する。

今後、総命が成長する主な舞台は地球外へ移ります。

その時、ホモサピエンスの役割は終わるのです。

まさに、種としての夕暮れを迎えるのです。

やがて夜が到来し、朝の来ない眠りにつく。

そして、新しい種が夜明けを迎えるのです。

生命の潮流

医療技術や生命科学の発展により、選択的受精が行われ、ジーンリッチやデザイナーズベイビーが誕生する。それと同時に、人工子宮または代替子宮が開発される。ティッシュエンジニアリングに代表される医療技術の進歩、ゲノム研究そして脳波を用いた電子機器の利用によってゲノムと脳が変化する。

ヒトゲノムの変化は先進国から始まる。富裕層の血統、有力な一族の血統、進化を渴望する人々の血統、宇宙開発関係者の血統、遺伝子の淘汰を勝ち抜いた集団の血統、生命の存続に危機を覚える集団の血統、宇宙進出と進化にロマンを感じる集団の血統、そして導命家の血統は新たなヒト種の母体となる。これ以降、新しいヒト種は新人、そして従来型ヒト種は旧人と呼ばれる。

旧人が担ってきた知的産業や知的労働は新人が担うようになる。知識と富と権力は脳的細胞である新人に集まる。金融、行政、政治、軍事、芸術などで世代交代ならぬ遺伝子交代が実現する。旧秩序では栄華と権力を誇っていても、新人を生み出せない旧人の国家、民族などは科学力、軍事力、文化力、創造力などで新人の集団に劣るため、新秩序では劣勢に立たされ衰亡する。

新人と旧人では能力差が大きいため、共生は不可能となる。これを解消するために、自治体の棲み分けが行われる。新人と旧人の間では、遺伝子の交流は殆どない。それに伴って遺伝子の棲み分けも常態化する。やがて社会は新人の共同体と旧人の共同体に二極化される。それぞれの共同体は、独自の倫理、価値観、道徳によって統治される。

新人は、地球よりも地球外での生活を求める。この傾向は総命がそのために生み出したので当然である。先進国の工業や産業は宇宙開発を中心に構成されている。宇宙開発は新人を主体として行われる。宇宙医学と工学の進歩によって、地球外居住地での妊娠、出産、育児が可能となる。これによって新人の間に地球外と地球での棲み分けが生じる。やがて地球外共同体が誕生。その地で**新種人**が生まれる。

新種人にとっての人間とは、新旧を含めたヒト種を指すため、ヒト種の次の種である彼らは、自らを人間とは見做さない。人間たちも新種人を人間とは考えない。人間は新種人を「超人」と呼ぶ。概念としての超人ではなく、生物としての超人である。

しかし、新種人は、自らを超人とは考えない。自分たちが特に優れているとは思わないからだ。ヒト種自体があまりにも幼く未熟なので、それを超えたとしても、優れた種族の証明にはならないのだ。

例えば亀より速く走れるからといって、その人が速いとは必ずしも言えないように。

新種人は、地球からも人間からも独立した共同体を建設する。彼らは地球周辺を支配し、地球人を管理する。その後、新種人たちの主な舞台は太陽系に移る。

地球はかつての役割を終え、母なる故郷として大切にされる。進化の主役であった旧人も役割を終え、終焉の夕暮れに黄昏る。

新種人たちは居住型探査船を建造し、新種人の中でも特に優れた人々を集めて編成し、太陽系外の探査に取り掛かる。

探査を進める過程で、新種人の次なる種が生まれる。

神劇

神々は、ただ無目的に宇宙を創造したわけではありません。

神々は創造を通して、彼らの物語を描いているのです。

すなわち「神劇」です。

前項で地球系DNA自体が一つの生命体と説明しましたが、今から1000年後あるいは2000年後、私たちのDNAは地球外にまで成長し、やがては他の惑星系DNAと出会います。

その際に様々な交流を経て融合し、新たな生命体となります。

私たち以外にも、宇宙の到る所でこうした成長と融合が繰り返されるのです。

惑星系DNAやその他のDNAは宇宙に遍く広がり、宇宙生命の情報網、神経網を形成します。

やがては宇宙そのものが進化し、上位次元の生命体となって根源生命に到るのです。

今私が執筆しているこの時も、地球を含めた幾億の惑星系DNAは宇宙の完成を目指し、根源生命に到る生命の道を歩んでいます。

私はその道を「八百万の道」と呼びます。

宇宙の進化を経て根源生命にまで至る生命の営みこそが、神々の描いた物語であり、神劇の大筋なのです。

もう一度繰り返しますが、他の惑星では、惑星系DNAの被造物たちが弛むことなく進化に邁進し、八百万の道を着実に歩んでいるのです。

御魂人

神々の創造した多次元生命体の一つに、魂界があります。

魂界は、私たちにとって非常に縁の深い場所であります。

なぜなら、私たちの本体は、魂次元世界に住む**御魂人（みたまびと）**だからです。

御魂人は、今生への入り口である「生の門」をくぐり、その際に、ホモサピエンスの肉体をまとい、名を授かりました。私たちは、御魂人が今生で演じている登場人物なのです。

舞台役者が衣装をまとうように、御魂人はあなたという肉体をまとっています。舞台役者が役名をもらうように、御魂人はあなたという名を授かりました。舞台役者が舞台上で演じるように、御魂人は宇宙という大舞台であなたと云う役柄を演じているのです。現在の私たちは地球編を生きており、小さな惑星を舞台として、あなたという登場人物を一生懸命に演じているわけです。

そして役を終えるか、肉体の寿命が尽きるか、あるいは別の事情によって死の門をくぐるときに、ホモサピエンスの肉体を脱ぎ、名を残し、役割を終え、魂界へ帰っていきます。生の門は、魂界からの出口、今生への入り口です。死の門は今生からの出口、魂界への入り口です。御魂人にとって、生死の門にそれほど差はありません。ただ、方向が違うだけにすぎないのです。

例えば私の場合ですと、私の本体である魂界の御魂人が、何らかの用事があったのかそれとも魂界の義務か、あるいはただの暇潰しなのかは分かりませんが、今生への入り口、つまり生の門をくぐりました。私の本体はそこでホモサピエンスの肉体をまとい、その肉体は季節に応じた衣服を着用し、親から授かった名を使い、今生での役割を得たのです。そしていつの日にか、私は死の門をくぐり、そこで肉体を脱ぎ、名を残し、御魂人に戻るのです。

ただし、ここで押さえるべきことがあります。私が魂界に帰ったとしても、それは「私」として御魂人に戻ったわけではありません。

なぜなら、「私」としての自我と、**御魂人としての自我**は異なるからです。例えば、演じている役者の自我と、登場人物としての自我の違いを考えてみればよいでしょう。舞台を降りてしまえば、彼は役者本人として生活するわけです。つまり、いま私たちが認識している人間としての自我は、御魂人の自我に包含されているのです。その意味で申せば、「私は私であって私ではない」「私は私であると同時に彼（御魂人）でもある」のです。

さて御魂人ですが、別の登場人物として今生に現れることもあります。

俗に云う「生まれ変わり」とは、例えばA氏がB氏として生まれ変わる、のではなく、かつてA氏を演じていた御魂人が今度はB氏を演じている、わけです。

御魂人が改めて別の人物を演じる際、過去の精神、覇気を継承することがあります。

B氏の性格や仕草にA氏の面影を見出すのは、御魂人がA氏を演じていた時の名残なのです。
ゆえに生まれ変わりと勘違いしてもおかしくありません。

導命と導命家

総命を導くこと、これを導命（どうめい）と言います。

その為に自分の意識と身体を進化させる者。

彼を導命家（どうめいか）と呼びます。

導命家の目的は総命を導くこと、進化はそのための手段であります。

根源力、宇宙の諸力、生命の力を土台として、主体的、意志的な進化に邁進するのです。

従来進化は自然に任せていましたが、ヒト以降の種に関しては意志的に行うのであります。

受け身の進化は過去の話なのです。

ヒトの肉体は、総命の成長を幽閉する牢獄ではありません。

ヒトゲノムは成長を抑留する二重螺旋の鉄格子ではありません。

ヒトゲノムは、成長の喜びを次代に伝える二重らせんのタスキです。

導命家は、ホモサピエンスの旧態然とした生命観から総命を解放せねばならないのです。

導命家になる者は次のような人たちです。

肉体を纏った御魂が自分の本体であると知っている者。

何らかの役割があると知っているがその役割が何なのかを探し求めている者。

充溢への渴望と情熱はあるがそれらをぶつける対象がわからない者。

御魂の光明を失った者。

表面上の快樂、付き合い、日々の満足に倦んだ者。

自らを御魂人であると認識しながらもそれに徹しきれない者。

生命の存続に危機を覚える者。

宇宙進出と進化にロマンを感じる者。

ホモサピエンスを超えようと渴望する者。

これらの人々は、導命家としての十分な精神的資質を有しています。

全てのヒトが導命家としての生き方を選ぶわけではありませんが、彼らの中から導命家が誕生する事を私は確信しています。

では、導命家として生きるとは何か。

それは導命という世界観、あるいは物語の中で、あなた自身を晴々と演じることです。

あなたは、御魂人が今生で演じている登場人物なのですから。

あなたが導命家として生きるならば、私は導命の種をあなたに渡しましょう。

あなたが、私の言葉に意義と価値と光明を見出すならば、己の意志と決意で種の内部を満たしてほしい。

あなたの心は、二重螺旋の産声を耳にするでしょう。

その種を精神の土壌に播くのです。

導命家の内なる光明がそれを照らします。

導命の種は芽を出し、一本の逞しい樹木へと成長します。

そして木々は集まり、導命のもりを形作ります。

もりは豊かな生命を育み、進化に到る者がそこから現れます。

内なる光明

私たちの肉体はDNAの被造物ですが、本体は御魂なのです。御魂は物質としては存在しないので、目に見えるわけではありません。しかし、その存在を認識することは出来ます。

内なる光明と温もり、それらが御魂そのものです。

日常をホモサピエンスとして過ごしていると、雑務や難題に忙殺され、本体である御魂の存在を忘れがちになります。やがては、ホモサピエンスの肉体が、自分の本体だと勘違いしてしまう。

その結果として、あなたの内側には世相のスモッグや浮世の砂埃が立ち込める。

御魂の輝きは力を失い、温もりは遮られる。

そして心の土壌は冷え固まり、凍土となり果てる。

あなたは被造物である肉体を自分の本体と勘違いしているため、光や温もりを外部に求める。

しかし、浮世の寒風はあなたに向かって鋭く吹きつけるだけで、心はますます冷えるのみ。

ここで、自分の本体が御魂であり、そこから豊穡なる光明と温もりが湧き出ていることに気付いた場合、どうなるでしょうか。

光明と温もりは、あなたの心を優しく照らすでしょう。

心の凍土は肥沃な大地へと生まれ変わり、むかし播いた幸福の種は萌芽の喜びに歌いだすのです。

導命家は、自分の本体は御魂である、と常に意識しましょう。それによって、導命家の内側は、輝きと温もりに満たされるのです。

自己像を形成する

思考と行動、そして自己像はともに影響を与えあう表裏一体の関係です。

侍が侍たり得たのは、明確にして厳格な侍像を作り、それに基づいて思考し、行動していたからです。

ゆえに、あなたの魂が素晴らしくとも、あなたの自己像が卑屈であれば、結局はそのような行動を実際にとるでしょう。

どのような人物になりたいのか、それをしっかり認識することは、とても重要なのです。

とは言え、ただ好きなように自己像を作ればいいわけではありません。精神力も威厳も覇気もないのに、王者としての自己像を作り、それに基づいて振る舞えば、本人は王者のつもりでも実際は道化に過ぎません。やはり、まずは現実を知ることが大切です。そしてそれには、自分と向き合うことが求められます。この場合、自分の弱さや醜さを避けてしまいますが、自己像を作るためには体当たりでぶつかる必要があるのです。

自分の弱点や欠点を見つめ、それを認めることは弱者の証拠であり、大変情けないことだ、と一般的に考えがちです。しかし実際は異なります。弱点や欠点を受け入れることは、強さの証明なのです。ここに弱者と強者の決定的な違いがあるのです。弱者は己の弱さを認めずに結果として強くなれず、認めたとしても強くなろうとしないため常に弱く、そのまま一生を終えます。しかし強者は己の弱さを認め、強くなるために努力します。そして、力強い一生を手に入れるのです。

大部分の人々にとって、現在の自己像とは、過去の積み重ねを土台としており、未来の自己像は現在を土台としています。一般的に時間とは過去から未来に向けての一方通行と考えられているので、過去現在未来と辿る手順は当然でしょう。しかし実際は一方通行でなく、**時間は未来からも吹いてくるわけです**。時間の風が現在を中心に渦巻いた状態なので、我々は変化をあまり感じないだけです。しかし、明確に意識することで時間の風は未来からどんどん吹き込んでくるのです。

自己像を作ろうにも、過去の出来事が暗く、触れるだけで凍傷になる程冷たい。さらに煤で汚れており、かつての輝きや色彩を失っている。過去を意識し過ぎているから、寒風が現在そして未来にも吹きつけ、人生そのものを冷え冷えとさせる。この場合は、未来に意識を向けることが大切です。明るく、温かく、歓喜に満ちた将来像。すると、暖かい風が未来から吹いてきます。そして現在と過去を温めるのです。冷たい過去は徐々に溶け、煤は未来の風によって吹き払われ、過去は本来の色彩と輝きを取り戻します。その状態から、自分にとって必要な出来事を選び、自己像の土台に組み込めばいいのです。

一般の人はこれだけで十分ですが、導命家は更なる工程が必要です。導命家には、ヒトを越えようとする意志を自己像に錬りこむことが求められます。一般的なヒトは、肉体、自己認識共にヒトのままなので、いつまでもヒトのままです。しかし、導命家は違います。あなたの本体である御魂人は、進化をもたらすために今生へ現れたのです。自分の役割を思い出さない。当然あなたの肉体は、一般的なヒトと同じですが、意識は進化へ向かっています。

導命家よ、進化に到った未来像、そして自己像を持ちなさい。そこから進化の風が吹いてきます

。

苦難とは心の鍛錬

生きている間は、様々な制約、煩わしい問題、不条理な出来事に絶えず遭遇します。

そのため、この世を厭う気持ちも起こるでしょう。

しかし、そうした苦難は、あなたの心を鍛錬する**鎚**なのです。

強い心は、鍛錬に次ぐ鍛錬によって生み出されます。あなたが強い心を求めるならば、何度も修羅場を潜り抜ける必要があります、存亡をかけた内外の敵との激戦を繰り返す必要があります。

勝利と敗北を重ね、鍛錬を続けなければなりません。

侍の鋭きところ、それは腰の刀ではなく、心の刀です。彼らの内なる光明は、白刃の閃き。

厳しい自己教育と苦難によって心を熱し、叩き、己の求める侍像へと鍛錬するのです。

あなたは侍でなくとも、あなたの心は侍と同じく鋭い刀であれ。

名刀となまくら刀があるように、心にも名心となまくら心が存在します。なまくら心は、たった一度か二度の敗北で刃を欠き、あるいは刀身が折れてしまいます。敗北後はひたすら相手に打たれるがまま、為す術もなく、己の心を鍛錬し直そうともせず、項垂れ、屈辱に耐え忍ぶが、やがては屈辱すら感じぬほど零落するのです。

あなたはいつまで無様な心を晒しているのでしょうか。勝利を求める灼熱の執念によって心を熱しなさい。激しい闘争の鎚で鍛錬しなさい。敗因という不純物を取り除きなさい。経験と認識と覇気を錬りみなさい。そうすれば、あなたの心は、勝利のための刀へと生まれ変わります。

生みの喜び

何か事を為す際は、その大小を問わず、心身に痛みを覚えます。いわゆる生みの苦しみです。そこにばかり目が向いてしまうと、やがて気力は萎え、活動から遠ざかり、遂には事業そのものが消滅してしまいます。

こうした事態を避けるためには、生みの苦しみではなく、生みの喜びに目を向けることが大切なのです。

例えば出産に伴う痛みや疲労ばかりを見るならば、これほど苦しいことはありません。女性にとっては文字通り命がけですから。しかしそれでも女性が出産に臨めるのは、新しい命を授かる場面や、子供と手を繋いで一緒に歩いている情景に喜びを見出しているからです。

今あなたが何らかのプロジェクトを任されているとしましょう。初めは上手くいっていましたが、今は困難や面倒事ばかりに意識が向かい、気後れが生じ、ストレスによる判断力の低下などに絡みとられています。このままでは企画どころか、精神的にも倒れてしまいそうなほど、追い詰められています。

ここで、生みの喜びに視点を移すのです。ほんの僅かですが、プロジェクトは着実に進捗しているのだから、そこにあなたの意識を向け、生みの喜びを実感することが大切なのです。さらに、生みの苦しみはあって当然だという心構えも同時に持ちましょう。

こうした喜びは、幸福の種に変化します。

それは少しずつあなたの心に播かれ、やがて実が生り、花が咲くのです。

心の三層

一の層 不安、苦痛、恐怖、孤独、自虐、不満

二の層 安心、快楽、勇気、連帯、自尊、満足

三の層 確信、極楽、覇気、統一、名誉、充溢

ヒトの心は、生きている間に三つの層を幾度も辿ります。

これは、三の層しか知らないように見える強者であろうと、変わりはありません。

むしろ、強者ほど一の層を何度も経験しています。

弱者は一の層へ転がり落ちる度に足腰が衰え、やがては立ち上がれなくなりそのまま消滅しますが、強者は何度でも立ち上がって三の層を目指します。

動く部分が右手の小指一本ならば小指で這って前に進み、障壁にたどり着けば小指で掴まり、よじ登る。途中で力尽きようとも、血走った目は上層を睨みつけたままです。

上昇本能、これが強者に共通する特徴と言えるでしょう。

そうした猛者のうちの一握りから、天下を掴むものが現れ、それぞれの時代を形作るのです。

心を整える

心は、様々な考え、悩み、苦しみ、痛み、怒り、しがらみの蔓に巻き付かれています。この状態が過度に到ると、「気」の巡りが悪くなり、血行不良ならぬ「気行不良」を起こします。そうなれば、疲労物質の乳酸は分解されずに溜まってしまい、肩こりならぬ、「心こり」の症状が出てしまう。長期間それが続けば、心こりは慢性化し、厄介な状態を招きます。だから、心の乳酸を溜め込まぬよう、日頃から注意を払うことが大切なのです。

心を締めつける蔓には、必要な蔓と不要な蔓の二種類があります。

必要な蔓は、勝利や心身の成長から生じています。この蔓がもたらす痛みや悩みは、心の鍛錬に必要なので、むしろ積極的に利用すべきです。

不要な蔓は、嫉妬や虚栄心から生じています。この蔓がもたらす痛みや悩みは、全くもって無価値、無意味。ただ痛いだけ、悩ましいだけ、苦しいだけ、腹が立つだけ。

今あなたが必要な蔓によって苦しみ悩んでいるならば、それは試練なのだから、しっかり受け止めなさい。

今あなたが不要な蔓によって苦しみ悩んでいるならば、それは無駄なのだから、さっさと断ち切りなさい。

巻き付いていた蔓がずいぶん減ったことでしょう。締め付けも軽くなり、心の風通しも良くなった。

乳酸も分解され、心こりの症状も改善されたはずだ。

その状態で、日常を簡単に見渡してみましよう。

何気ない新しい発見に出会えるはずです。

身体感覚を鍛える

身体感覚に乏しい者、身体を意識しない者は、総命や多元生命体を理解することが難しい。ゆえに、身体感覚と意識を高め、想像力を鍛える事が大切です。また、小宇宙と呼ばれる人体を通して、生命の機微を知ることは、宇宙を知る事にも繋がります。

1

全身の外観、器官、臓器、細胞、素粒子へと意識を向ける。素粒子の次元にまで意識が到達すれば、地球内外や他の物体との区別は消滅するため、あなたは宇宙と渾然一体となる。身体感覚と意識を宇宙に向かって徐々に拡大し、総命の一部であること、銀河系の一部である事、宇宙の一部である事、多次元生命体の一部である事、そして根源生命の一部であることを実感する。

2

悠久なる生命の流れに全てを委ねている情景を想像する。そして「自分は点としての存在ではない。生物としては非常に儚く一瞬の命だが、導命を通じて未来の人々とも意識が繋がっている。私は幸福で満たされている」と意識する。

これらの方法を実践することで、あなたの身体感覚と意識は、総命や多次元生命との一体感をより強めることができます。

生きるためには理解せねばならぬ。理解するためには学ばねばならぬ。
先人の過ちや成功から学べる者。これは幸いである。しかし実体験からのみ学べる者。
これは不幸である。その経験が先人の多くを殺め惑わせ誤らせたことでも、
体験せねば理解できぬ者はそれを体験せねば理解できない。
そして悲しくも、先人と同じ道を歩む。結局は、新たな教訓の傍らに屍を横たえる。

一人の愚者は、教訓を嘲笑い、経験からのみ学ぶことを是としている。
しかし経験から得るべき本質を認識する力もなく、ただ経験の樹木に近づきさえすれば理解できると勘違いしたまま、認識の果実を手にとろうともせず、ひたすら同じ道を狂気さながらに往還する。経験を貴ぶその心は勇ましいが、さりとして結末への覚悟もなく、冷酷な現実が一睨みすれば、糞尿垂らして泣き叫ぶ。己を恨まず周りを憎み、自ら招いたその結末を、周りに押し付け逃げ惑う。生きていれば何度でも。死ぬまでこれを繰り返す。死んでしまえば似た者が、その跡たどって滅び去る。

一人の賢人は、経験の樹の下を通れば、必ず認識の果実を食べ、自らの血肉とする。先人の積み重ねた経験の書籍を読んで追体験し、そこから独自の見識と普遍的な教訓を得る。

愛すること

導命家にとって大切な心の働き。

それは、愛することです。

愛するとは、あなたと他の生命を、光と温もりで満たし、一つの生命体を形作ることです。

愛する対象と一つの生命体になることです。

イメージしてください。

あなたと、あなたの愛する対象の間に、精神の血液が通い、感情の神経が繋がる場面を。

これが、導命家の愛です。

そして、愛の対象は実に幅広く存在します。

馬、犬、本、建築物などのように有形のものから、名誉、思想という無形の存在まで様々です。

建築物や名誉、思想が生命体と思えなければ、次のことを思い出してください。

森羅万象は、根源生命によって生み出された生命体である、と。

建築物も思想も名誉もそしてあなたも、全ては、根源生命の生命現象の一つである、と。

総命を愛の対象と捉える導命家は、自分と総命を一つの生命体と覚ることが出来ます。

名誉を愛の対象と捉える導命家は、自分と名誉を一つの生命体と覚ることが出来ます。

志を愛の対象と捉える導命家は、自分と志を一つの生命体と覚ることが出来ます。

そして、導命家にとって最も重要な根源生命への至高の愛は、生きる事への愛に繋がります。

至高の愛によって、あなたの人生は、歓喜と幸福と情熱と美に満たされるのです。

一日をしっかりと生きる

肉体の命はいつ果てるか解りません。死の門は時と場所を選ばずに現れます。その日に倒れ、肉体を脱ぐことになったとしてもそれは運命なのです。それに納得できるよう、日常を大切にし、一日一日を懸命に生きましょう。起床してはしっかりと生きることを決意し、就寝前には命あることを感謝しましょう。

日常生活を大切に生きるとは何か。

それは、例えば土台や地面の保守管理であり、地面に張り巡らした根の弛まぬ活動のことです。屋根の飾りや門扉ばかりを磨いても、土台と地面の補強、管理が疎かになれば、豪華な建築物も倒壊する。

春の喜びをもたらす桜も、根腐れすれば、花は咲かず、幹は枯れる。

桜の花が春の一時期に咲くのは、それ以外の時に、弛むことなく根が働いているからです。

冬の日も根から養分を吸って春の来たる時を待ち、枝は静かに形を保つ。

そして時期が到来すれば、豊穡なる生命を解き放ち、春の陽光を一身に受けて咲き誇る。

小さな幸せに感謝する

大きな幸せが欲しいけど、なかなか手に入らず、それゆえに自分は不幸だと考えているのでしょうか。

ああなるほど。不満に塗れたその顔で、あなたの日常を見つめていても、大きな幸せには届かないはずですよ。

それどころか、本来なら手に入っているはずの幸せさえも、あなたには届かないでしょう。

不平に満ちた日常を土台にしても、それは砂のように儚く、泥沼のように沈むだけ。

手を伸ばせばその分だけ、幸せは遠ざかってしまう。

あなたがその幸せを、あるいはまだ見ぬ幸せを求めるならば、身近にある小さな幸福の積み重ねを土台として、大きな幸福に手を伸ばしなさい。

小さな幸福に気付くには、「当たり前」の考えを減らしなさい。何事もなく、平静に過ぎていく日常は、実に有り難い事なのです、幸運なのです。大地が軽く跳ねるだけで、人間の営為はいとも簡単に粉砕される、たとえあなたが富貴でも剛毅でも。

「当たり前」が減ったのなら、そのままあなたの周囲を見つめ直してみなさい。家族、友人、同僚、今日の朝食昼食夕食、一通の何気ないメール、そして一杯の水。全てに、今までとは違った輝きが見えないでしょうか。その輝きに美しさを感じないでしょうか。それが、あなたにとって一番大切な幸福なのです。そしてその幸福は、あなたに微笑みをもたらすでしょう。

自律と自立

心を最善の状態に保つには、何よりも自らを律することが必要となります。

自律です。

では、自律によって保たれる導命家の心とはどのようなものでしょうか。

それは、内なる光明の輝きと温もりに満ち溢れた状態です。

ヒトゲノムの枠組みを超えて自らを進化させ、総命を導く者にとって、それは必須の状態と言えるでしょう。

現時点では、進化に理解を示さないホモサピエンスが地球人の大半を占めます。正確には、進化をするという発想すら持たないホモサピエンスが大部分を占めています。彼らの妄動によって、進化を是とする導命家の内なる光明の輝きと温もりが乱されないよう、自律心をしっかりと働かせ、理想的な心の状態を保たなければなりません。

自律を果たした後は、内的な自立を目指すことが求められます。

導命家は進化だけでなく、人生における幸福も追求します。

その幸福とは、心の作用によって生まれます。一般的に莫大な富や社会的な成功は、幸福をもたらす源泉または幸福そのものと見做されていますが、それらは心的作用に影響を与える外的な要因であって、幸福の源泉でもなければ、幸福そのものでもありません。

導命家の求める幸福にとっては、外的な要因ではなく、心に作用する内的な要因が最も重要なのです。

内的要因とは何か。それは、満足、余裕、そして感謝です。

満足は心に余裕を生み、余裕は周囲に対する感謝へと繋がります。

そして感謝は、導命家の心に幸福感を呼び起こします。

いわば幸福とは、感謝へ至る一連の状態そのものと言えるのです。

満足、余裕、感謝。これらは一見すれば他愛もなく手に入り、容易に実践できると考えがちです。

しかし、実際はどうでしょうか。何かに満足してもしばらくすれば不満を覚える。心に余裕ができて時間経てば雑念で埋まってしまう。周囲への温かな感謝もやがては冷え冷えとした恨み辛みへと変わる。そのことを反省し、改めて満足と余裕と感謝を心掛けても、やはり同じような経過をたどってしまう。我々の日常に思いを馳せれば、内的要因を満たすことの難しさがよくわかるはずです。

満足していること。
心に余裕があること。
感謝が出来ること。

まさに幸福ではないでしょうか。この幸福へ至るためには、前述した内的要因が、外的要因の支配下にあっては意味がない。なぜなら外的要因は極めて不安定だからです。それに左右されず、動じることなく、自らの足で立っている状態、すなわち、内的自立が求められるのです。

心の自立は幸福の土壌となります。

自律心を太陽として、自立心の大地を照らし、幸福の種を育むのです。

高貴

高貴と気品は、外部環境や教育によってもたらされるよりも、魂の高潔さと透きとおった自律によって体得するものです。

高貴な者、気品ある者にとっての自律とは、呼吸のように自然な、魂の生理現象なのであります。

下賤な者が取り繕う気品とは、陸に打ち上げられた魚の呼吸であり、それはただ荒々しく、痛々しく、そして場違いなだけです。

本性

導命家よ、あなたはまず、人間を知りなさい。

自由、正義、平等、慈愛、慈悲、調和、互助、互惠、清廉、公正、喜捨、寄付などがあるように

、
支配、殺人、強姦、強奪、差別、迫害、暴力、裏切り、詐欺もまた、人間の本性を構成しています。

これらを全て受け入れた上で、あなたは人間として生き、仕事を遂行し、役割を完遂しなければならないのです。

導命家よ、あなたはまず、自分の本性を知りなさい。いくら善人を取り繕っても、心の奥底にひそむ歪な悪を打ち消すことはできないのです。むしろ、「自分は良い人だ、善人だ」と綺麗事ばかり言っている人ほど残酷だったり支配的だったりしますから、あなた自身が「私は暴力も支配も裏切りも反対です」と自分に言い聞かせ、それを信じて疑わないのなら、あなたはまごう事なき異常者です。悪を自覚しない偽善者ほど性質の悪い者はいません。

あなたは状況や環境次第では、親を打ち、子を裏切り、兄弟姉妹を殺し、友を迫害するでしょう。

これは、あなただけではありません。誰しものが、かくなる性質を有しているのです。

ゆえに、こうした状況や環境に堕ちぬよう、巻き込まれぬよう、身を律し、警戒を怠らず、団結して危機に備えなければなりません。

清濁併せ呑む

心身に美醜をまとい、浮世に清濁併せ呑む。

これ、人生なり。 導雲

人生汚れずに生きていこうとしてますが、その魂胆からしてすでに汚れているわけです。

少々の汚れなどは気にしなさんな。

堂々と受け入れなさい。

濁ったら濁ったでしようがない、あとは綺麗にすればいいのです。

濁りを浄化することも清浄の役割ですから。

そういうこともひっくるめて楽しんでこそ、人生の達人っていうものでしょう。

種の恐竜

2050年には、ホモサピエンスの数が90億を超えと言われています。六十億の現時点でさえ大変なのに、90億ともなれば資源問題や環境への負荷はどうなるのか、大変気にかかります。

それにしても90億人ともなれば、もはやヒト種器官ではなく、「種の恐竜」と言えるでしょう。私たち人間は、地球上を闊歩する恐竜です。ひとたび咆哮すれば天は震え、地は割れる。実に雄大です。

ただ、このように勇ましい姿を想起する反面、本家の恐竜が辿った結末も、脳裏をよぎります。

恐竜の場合は隕石の衝突による環境変化に、その巨大さゆえに適応できず、滅んでしまったと言われています。その後は、哺乳類が栄え、今のヒト種に至っているわけです。そのヒト種がいまは、種の恐竜としてわが世の春を謳歌しているわけですが、やはり恐竜同様に、何らかのきっかけで環境の変化が起こり、その巨大さゆえに滅亡するのかもしれない、とぼんやり想像してしまいます。

ところで、他の生物はヒトをどう見ているのでしょうか。

ヒトは雑食ゆえに何でも食べますが、これ自体は問題ではありません。

なぜなら、他の生物も何かを捕食して生きているわけであり、ヒトだけがそれを許されぬというのは、生命の理に反するからです。

ただし、ヒトの場合は限度を知りません。そして生存環境を自ら破壊し、その結果に苦しんでいるわけです。さらに自種を破壊するに足る核兵器を大量に保有し、互いに向けあってもいます。これは、他の動物にとって最も不可解な点でしょう。滅亡のきっかけを自ら準備しているわけですから。

しかしながら、自殺でもする気なのかと思いきや、人間の個体数は年々激増し、勢力はますます隆盛を極めていきます。

人間と言う種族は、このまま自分たちはおろか地球までをも食い尽くす、直立二足歩行の凶悪な猿にすぎないのではないのでしょうか。

そう遠くない未来。滅びゆく恐竜の隙間をぬって哺乳類が繁栄したように、我々の中から新しい種族が誕生し、ホモサピエンスの断末魔を聞きながら、新たな文明を築き上げるのかもしれない。

自浄作用

以前ならば、過酷な自然環境、未熟な医療、絶え間ない戦争、疫病の蔓延、乳幼児の高死亡率などによって人口の増加は抑えられていました。科学力も地球や生態系に与える影響は微々たるもの。

しかし現在、かつて人口抑制の役割を担っていた要素は、以前ほど脅威にはなっていません。もはや、ヒト種を抑える術は残されていないように見えますが、果たしてそうでしょうか。

ヒト種は、総命という生命体の一部であります。そのヒト種が一線を越えれば、総命はヒトを異物、悪性ウイルスと見做すでしょう。その時、総命の自浄作用と免疫機能が働き、「駆除」を実行します。それは、**核兵器の使用による種個体と建築物の大量破壊、そして放射線障害による生殖能力の著しい低下、そしてヒト種だけに感染する殺人ウイルスや細菌の猛威**となって現れるでしょう。解りやすい例で言えば、全面核戦争と核施設の崩壊がそれです。

これによって現存の個体数は大幅に減少し、生き残ったヒトたちは生殖能力を破壊されるため、出産数は著しく低下します。

仮にそうなった場合、従来型のヒトに代わって、放射線に強い新しい人々が主体となって文明を復興させ、宇宙を目指すでしょう。恐竜の後、哺乳類が繁栄したように。滅亡寸前にまで追い詰められた従来型のヒトも、自分たちでは地球およびヒトを治められないことをようやく悟って、新しいヒトに地球の統治を委任するでしょう。

しかしながら、これは否定的なシナリオです。大量の生物が死滅する事態を、我々地球系生命体は40億年の歴史の中で何度も経験し、その辛さはDNAに刻まれています。もう結構です。その様な惨劇を自ら招くほど、私たちホモサピエンスは知恵無しではない。

では、自浄作用の一線を知るにはどうすればいいか。それは、ストレスです。人体でも、細胞がストレスを感じ、それを発信することがあります。総命を構成するヒト細胞が、地球の現状にストレスを感じているということは、総命もまたストレスを感じている可能性があるわけです。あるいは総命自身のストレスが我々に伝わっている可能性も考えられます。

総命を導くために遣わされた導命家は、自身のストレスだけでなく、総命のストレスにも思い至ることが求められるのです。

総命のストレスそのものは、惑星に充満している澱みや圧力を、地球外に解き放つことで軽減できるでしょう。そのためには、宇宙開発に全力を注ぐことが最優先されるわけです。宇宙開発に従事する導命家は、会社の利益や国威発揚という次元だけではなく、総命の成長と言う全体的な視点で眺めることが誰よりも要求されるのです。

資源の獲得

資源とは生命体にとっての養分です。いまは地球のみから補給し、それで補っていますが、やがては危機に直面するでしょう。こうした事態をなるべく遅らせるため、21世紀になってから、持続的な開発という概念が人口に膾炙し始めました。

地球という一つの惑星の中だけで資源をやり繰りするこの考えは、数十年単位のような比較的短期間では効果を上げるでしょうが、100年、あるいは1000年単位ともなれば心もとなく、1万年では完全に無力です。

1万年後の世界に実感を抱くことは難しいかもしれませんが、100年後、200年後ならばごく身近に感じる時間でしょう。子孫の事を考えるならば、地球外での資源獲得を視野に入れた開発理念が必要となります。

しかし、それは中々難しいものです。そこで、理念を生み出すための一助として、現実的な認識空間を地球外にまで拡大することを提案いたします。例えば、何処かの小惑星で採掘された鉱物資源が地球に輸送され、商品や道具となり、日常で使用されている場面を想像して下さい。その場面に強い現実感や臨場感を伴えばさらに良いでしょう。

とは言え、残念ながら、大抵の地球人にとってはSF程度の認識で、臨場感や現実感、そして危機感を持つことはないでしょう。

しかし導命家は大半の地球人と同じではいけません。導命家には、抜きんでた想像力、空間認識、そして未来から今を眺めるという幅広い時間感覚が要求されます。

前述した理念の創出は、資源に余裕があるうちに着手することが大切です。追い詰められた拳句に実行しても、場当たりの対応に陥りやすいからです。大局的に事態を把握できる新しいヒトが主導権を握っていれば幾分ましですが、従来型ヒト種が全権を掌握しているときに資源の枯渇という事態に遭遇すれば、もはや絶望的な混沌に見舞われるだけです。

資源の欠乏に喘ぐ子孫から、21世紀初頭の地球人はなぜもっと早く資源対策に取り組まなかったのか、と非難されるでしょう。

当然導命家は、未来の声にも耳を傾けなければなりません。

導命分析

多元生命体の項目で説明したように、人間の世界は様々な生命体によって構成されています。それは国家、民族、企業、家族などです。

指導者はそうした生命体の「頭脳」を担当し、勢力の維持発展拡大に努めるわけですが、当然ながらその過程は生存闘争そのものであり、敵は他の生命体です。弱い相手ばかりなら苦労しませんが、やはり手強い生命体は存在し、その数は少なくありません。

こうした環境を生き抜くには、場当たりの衝突するのではなく、相手を観察して情報を収集し、それを分析して戦略戦術の策定に役立てる必要があります。

その分析方法を今から紹介します。

「六基」「六素」と名付けた二つの視点があります。

六基とは

魂、遺伝子、首脳、身体、生存圏、環境。

六素とは

脅威、補給、防衛、武器、情報、技術。

では、国家と企業を例にとって六基と六素を説明しましょう。

六基

国家

魂とは建国理念。

遺伝子とは国民の道徳、憲法、法律。

首脳とは政府。

身体とは領土、領民、国家資産、産業。

生存圏とは隣国、敵国、友好国、国際機構。

環境とは海洋国家や大陸国家などの地理条件、自然災害。

企業

魂とは設立理念。

遺伝子とは定款、組織構造。

首脳とは執行部、大株主。

身体とは会社、保有している資産、役職員。

生存圏とは企業の業種。

環境とは寒冷地帯、温暖地帯、自然災害。

六素

国家

脅威とは敵国、反政府集団。

補給とは外貨の獲得、資源の輸入、人口の調整。

防衛とは軍隊、防諜、国民教育。

武器とは軍隊、主要産業、教育水準の高さ。

情報とは通信、諜報、マスメディア、民間交流。

技術とは主要製品の製造力、工業力。

企業

脅威とは競合他社、情報漏洩、大規模な天災。

補給とは経営資金、リクルート、安定した仕入れ。

防衛とはメディア対策、工場の耐震強化、社員教育、情報管理。

武器とは主要製品、研究所、企業ブランド。

情報とは競合他社の新製品、政治の動向、顧客層の動向。

技術とは主力製品の製造力、新たな製品の開発力。

六基について

魂である国家理念と身体である国民が不一致ならば、その国は根本的な統合を失い、政府と民衆が常に対立関係となります。企業も同様です。その様な生命体は、統治力が少しでも弱まれば、内外からの揺さぶりによって容易に瓦解します。それとは逆に、魂と身体が一致していれば、少々の事では揺るぎません。危機に際しては、より一層結束を強めます。

各次元生命体の指導者は、その魂を具現化した存在であるべきです。

指導者を選ぶ者は、己の属する生命体の魂を誰よりも愛すべきです。

無魂の人々からは無魂の指導者が、有魂の人々からは有魂の指導者が生まれます。

六素について

恒久的戦国時代を生き抜くうえで、六素は一つたりとも欠けてはなりません。

斉藤道三、織田信長、そして黒田官兵衛にとってみれば、六素は常識中の常識でしょう。

特に情報と補給の重要性は、人体にとっての水と血液に等しく、情報と補給を軽視する個人や集

団は、その時点ですでに死亡していると思倣してよいのです。何故なら、彼らは必ず敗北するからです。

部分と全体

あなたの臓器たちが、其々の機能に優劣を設け、争っているとしましょう。

心臓は血液を送り出すから偉いと主張し、肺は酸素を取り込むから誰よりも優れていると自惚れる。赤血球は心臓と肺に対してストライキを起こす。彼らのやり取りには、生命の維持や発展に関わる本質的な意義があるのでしょうか。部分と部分とが、機能的な差異だけを巡って優劣を競うことにです。

あなたにとっては無意味かつ迷惑であり、ただ器官として機能すればいいのだから、一体何を争っているのか理解に苦しむでしょう。

呆れたあなたは臓器たちに語りかけます。

「お前たちは私という全体を構成する一部として機能しているのだから、単独での価値を比べあっても意味はないよ。自分を知りたければ、まずは全体との関係性で考えることだ」

しかし臓器たちにその意思は伝わらず、彼らは全体像が欠落したまま、俺が一番だ、俺があいつを支配する、俺はあいつより優秀だ、と今でも争っています。そして、あなたの健康は徐々に蝕まれていくのです。

ヒトが総命の体内でやっていることも、畢竟これと同じなのです。自分の国は他国よりも優れている、俺の企業はあいつの勤め先よりも規模が大きく安定している、だから俺の方があいつよりも優秀だ、などです。

導命家は、部分的な差異の是非を、全体、すなわち総命との関係で捉えなければなりません。それだけでなく、総命という全体の成長を常に意識して活動するのです。

ただし競争の全てが無駄と言うわけではありません。総命の成長に有益な競争は、どんどん行うべきです。それはつまり、導命家が進化するということです。進化の為の競争ならば、優越感ならば、それは生命の掟に適う大変素晴らしいことです。大いに競い、大いに誇りなさい。

戦争と平和

生物の行動原理は古代から一貫しています。繁殖と捕食に有利な生存環境の獲得、維持、拡大、そして生殺与奪権を巡る争いがそれです。人間に到っては、経済、法廷、家庭などありとあらゆる場所で生存闘争を繰り広げています。

こうした争いの、もっとも苛烈な形態が戦争です。20世紀は世界大戦を二度経験しましたが、これらの戦争を通してヒトは何かを学んだと言えるのでしょうか。ファシズムや軍国主義は否定されましたが、戦争そのものは外交手段、金融・経済の潤滑油として堂々たる地位を占めております。戦勝国の引き起こした戦争や紛争の数々を見れば一目瞭然でしょう。

では、宇宙の時代が始まった場合はどうなるのでしょうか。宇宙条約で宇宙空間の軍事利用は禁止されているようですが、戦後の歴史と人間の本能を鑑みれば、条約に抑止力としての役割は期待できません。軍事権を掌握する集団にとって、戦争が利であれば軍事力を行使する。条約の遵守が利に適わなければ、その集団は条約を破棄するか、あるいは解釈の隙間を通り抜け、独自に行動するだけですから。

将来世界政府が誕生し、世界市民、地球人意識が醸成されたとしても平和は訪れません。戦争や紛争が支配層に莫大な富をもたらす構造は変わらないからです。彼らは、世界政府幹部の派閥抗争、世界政府の支配に対する反発、世界市民同士の対立などをもとに独立戦争、大小規模の紛争を惹起するでしょう。**衝突する集団の単位が国民から世界市民になるだけです。**国境線が消えようとも利害の境界線が人々の間に横たわる限り争いは続くのです。地球外共同体が誕生し、さらには新種人の国家が誕生しても戦争の可能性は十分存在しています。未来永劫、戦乱の火種が尽きることはありません。

いわば、恒久的戦国時代。

これが生物の定めなのです。

人間食物連鎖

(問) 私はいつも殴られ、蹴飛ばされ、無視され、唾を吐きかけられ、所有物を奪われ、罪を押し付けられ、愛するものを殺されています。

「若き導命家よ、それはあなたが弱いからです。強くなろうとしないからです。戦おうとしないからです。戦うべき時はきちんと戦いなさい。争いそのものを避けるが余り、却って事態を深刻化させることは珍しくないのです。法律書が必要であれば法律書を、刀が必要であれば刀を、弓矢が必要であれば弓矢を、槍が必要であれば槍を、銃が必要であれば銃を手にとらねばならないのです。家族や仲間を護るために敵を倒し、敵によって倒れることは名誉と考えなさい。

それでもあなたが非暴力と非戦を貫くならば、暴力と戦いを肯定する者たちから常に殴られ、蹴飛ばされ、無視され、唾を吐きかけられ、所有物を奪われ、罪を押し付けられ、愛するものを殺されることを覚悟し、受け入れなければならないのです。畢竟この世は弱肉強食の恒久的戦国時代なのですから」

(問) 私は理不尽な暴力も愛する人を殺されることも戦うことも受け入れることができません。

「導命家よ、私の言葉をよく聞きなさい。

ヒトは食物連鎖の頂点に君臨していますが、ヒト種の中にも厳然たる食物連鎖があり、喰らう者と喰われる者が存在します。

強いヒトは弱いヒトを喰らい、強い企業は弱い企業を喰らい、強い国家は弱い国家を喰らう。

自分を狙う力にはそれ以上の力で応じなければ勝てず、相手を狙うには相手以上の力が必要なのです。

暴力然り、経済力然り、軍事力然りです。

喰いたければ、強くあれ。

喰われたくなければ、強くあれ。

生命の掟に善もなく悪もなく、ただひたすらに自然なのです」

(問) 私の知人や家族は志を持とうとせず、必要とせず、むしろ軽蔑し、見下している。ともすれば、私の志も折れ、平凡の泥濘に沈みかけてしまいます。

「志を持つ者は平凡を愛さねばなりません。なぜなら、屈強な肉体も細胞と細胞の結合によってもたらされるように、歴史上のあらゆる偉業は平凡さの上に打ち立てられるからです。

あなたは志が折れそうだと言いましたが、そもそも志は折れません、そして沈みません。もし周囲に感化されて志を捨てるなら、あなたの志がその程度だということです。踏み込んで言うならば、それはもともと志ではないのです」

(問) 仰る通り志ではなかったのかもしれませんが、そこで教えてください、志とは何でしょうか？

「志とは人生の大骨格。意志とは精神の血液です。ゆえに、有志者と無志者は、生物としては同じヒトであろうとも、生き様においては全く別個の生物です。動植物が自種を中心として群生するように、有志者は有志者と共に生活することが自然なのです。

戦国武将が己の欲望と才覚を信じたが如く、幕末の志士が己の役割と情熱に殉じたが如く、有志者も己の志に従って一心に生きることが大切なのです」

(問) 志が原因で周囲と衝突した場合はどうすればよいのですか？

「志はその激しさと周囲の無理解ゆえに、辛辣な批判を受けることがあります。しかし落ち込んだり感情的に反発してはいけません。有志者は、それを心身の成長に役立てなさい。感情的な批判や誹謗中傷の類は論外ですが、技術的、論理的な問題点などを的確に指摘している有益な批判には、きちんと耳を傾け、己を高めるための材料とすべきです。批判されているからと言って感情的に拒絶するのは、非常に勿体ないことです。退けるべき内容は退け、受け入れるべき内容は受け入れるという毅然とした姿勢が、己を強くし、成長させるのです。また、相手に批評させることは、その人物の知能、価値観、観察力、性格、常識等を判断するうえでは大変有効でもあります。

有志の導命家よ。生の激流に志の杭を打ち込み、死の暴風に精神の旗をなびかせなさい。志ある死は志なき生に勝る、そして、志ある生は全てに勝るのです」

命を大切にする

名のために 棄つる命は惜しからじ 遂に止まらぬ 浮世と思えば 「平塚為広」

平塚為広は、戦国期から安土桃山時代にかけて活躍した武将です。関ヶ原の戦いでは大谷吉継に属し、小早川秀秋や藤堂高虎の兵を相手に奮闘しましたが、最期は榎井太兵衛に討ち取られ、武人として見事な最期を遂げました。

冒頭の歌は、関ヶ原で詠んだ辞世の句です。

部隊は壊滅し、孤軍奮闘していた彼は死を覚悟したのでしょう、「名のために 棄つる命は惜しからじ」とその時の心境を表現しています。

彼にとって、「名」とは、まさに命以上の価値があったのです。そして、その名を後世に残すためなら、肉体を捨てても構わない、と。

彼が「名」に価値を見出したように、命以外の存在に命以上の価値を見出し、その存続を願う者にとってみれば、自分の命は「それ」を生かすための手段であり、道具に過ぎません。

もし彼が、武名を最大限に尊重していながら、肉体が死ぬことを恐れて投降し、徳川家康に許されたとしましょう。その場合、戦国武将としての名前は残ったと思いますが、その代わり、現在私たちが見出しているような輝きはそこに無かったと思います。命以外の存在に全てを捧げたがゆえ、彼の武名は現在もなお澆刺としており、豊かな生命力を湛えているのです。

導命家も、平塚為広の様に命を大切にしなければならないのです。命を大切にすることは、ただ生きることではなく、目的のために命を捧げることです。導命家にとって、自分の命は手段であり目的ではありません。

導命家の目的は、肉体を纏ったその意義に応え、名を授かり役割を担ったその栄光をさらに輝かせることです。志の道の先に、あるいは役割の向こうに死の門が見えたとしても、導命家は堂々と突き進み、意気揚々とその門をくぐるのです。

闘争

人間の世は恒久的戦国時代です。例えば戦争、紛争、企業の乗っ取り、受験、就職活動、そして色恋沙汰に到るまで、この世は悲喜こもごもの争いに満ちています。ゆえに我々導命家は、想定外の事態も含め、あらゆる闘争に備えなければなりません。

戦い方を学ぶにあたっては、まず何よりも、考え方を学ぶ必要があります。いわば、基本理念、原理原則です。あなたが平和ボケしたお花畑脳の持ち主ならば、今現在あなたの頭の中では蝶々が舞っているでしょうけど、脳の外側では鋭い銃弾やどす黒い権謀術数が飛び交っているわけです、蝶々を追いかけていたら弾丸で頭を打ち抜かれた、あるいは自分が捕獲されてしまった、ということにならぬよう、闘争仕様の思考方法に切り替えてください。

それでは参ります。

《戦う際の心構え》

警戒されないように、表面的な友好を装いつつ、様々な形に擬態して包囲を進める。敵を信用させるのは、警戒心を和らげることで相手の抵抗を抑制するため、そして来たるべき時の「裏切り」を効果的にするため。敵対心を持っている人物や集団を、表面上の善意や友情のみで信用することは、愚の骨頂である。相手の敵対心を見抜けず、「彼らの友情は真実である」と致命的な勘違いを犯した個人や集団は、生命の掟に従い宇宙から消え去る。

敵に対しては、紳士的に振る舞うことが効果的ならば紳士的に、友好的に振る舞うことが効果的ならば友好的に、高圧的に振る舞うことが効果的ならば高圧的に、暴力的に振る舞うことが効果的ならば暴力的に、平和的に振る舞うことが効果的ならば平和的に、好戦的に振る舞うことが効果的ならば好戦的に振る舞え。そして、そうした振る舞いを真実だと思わせることが効果的ならば真実と思わせよ。偽りだと思わせることが効果的ならば偽りだと思わせよ。敵に対しては、騙す、利用する、滅ぼす、の何れかで対応すべし。

友好に擬態した包囲網を形成すると同時に、道義的な批判も常に行い、倫理的に優位な立場を維持すること。相手が譲歩すればその分だけ政治的要求を強め、受け入れ不可能な要求を執拗に突きつける。それと同時に、自分の弱点を意図的に作っておく。進退に窮し、憤激に駆られた相手はそこを攻撃してくる。大義名分を手に入れた後は、自陣の正義を声高に唱え、相手の邪悪を批判し、全面攻撃に移行する。

攻撃については、相手の弱い部分を狙うこと。戦域よりも戦線の方が防御は弱く、戦線よりも拠点の方が潰しやすい。立体よりも面、面よりも線、線よりも点を狙うのである。敵組織の連携を断ち、情報や物資など戦力を維持するために必要な要素を遮断し、点の状態で孤立させる。戦力

差で優位に立ったとき、満を持して総攻撃をかける。

戦力差については、自軍と敵軍の格差を優位に保つことが重要である。よって敵戦力を分散させ、戦力差が優位になった後に攻撃すること。自軍が寡兵ならば尚更である。

大規模な戦いを行う場合は、必ず敵の内部分裂を画策し、敵勢力を分割すること。その際は敵内部の禍根を刺激することがよい。関ヶ原の戦いにおいて、徳川家康は豊臣家臣団の禍根を刺激し、文治派と武断派を敵対させ、分裂を誘発した。禍根が宗教、民族問題、一族の対立など個人では解決できぬものであり、さらにそれらがアイデンティティーの基盤ならばより強固に作用する。

戦いでは、規模の大小に係わらず戦略が要となる。小田原征伐の際、北条家は、豊臣軍が補給不足によって自滅することを前提に籠城戦という戦略をとったが、秀吉は大量の大型船を動員して物資の補給を行い、一夜城を築城した。これによって、北条方は戦略の前提が崩壊したことを悟り、秀吉に降伏した。このように戦略の前提と戦術は土台と家屋の関係である。作戦開始以前に前提が崩れた場合、必ず前提から練り直すこと。それが出来なければ、作戦を中止しなければならない。無謀な作戦の強行による組織の壊滅は、作戦中止による損失とは比べ物にならない。

敵の戦略を無力化するには、その前提を見抜いて打撃を与えればよい。前提を知るには、前提それ自体だけでなく、敵集団の価値観、思考様式、歴史、文化といった前提の前提についても考えることが重要である。その際は思考や観察眼を曇らせる要素、つまり虚栄心や希望的悲観的観測などを可能な限り排除した、虚心坦懐の心構えで行うことが肝要である。

《統合運用》

組織が最も重要視すべきは統合運用である。

強風に統率された五千の兵を率いる甲武将は、五万の大軍を率いる乙武将を討ち取り、首級を挙げた。

戦勝祝いの宴で、甲は自分の扇子と乙の扇子を手に取り、家臣団に語った。

「奴の扇子は大振りだが、肝心の要が欠けておる。余の扇子は小振りだが要はしっかりしておる。これが勝敗を分けたのだ。」

そう言い終えると、二本の扇子を床に放り投げた。一方の扇子はだらしなく広がり、一方は固く閉じたままであった。

《大義の御旗》

大事業を為す際は、必ず大義名分の御旗を掲げること。

行為と大義の内容に背反があろうとも旗を降ろしてはならない。

特に戦争の場合は、軍事力と同程度の大義名分力が必要となる。

大義名分に基づいて己の善を主張し、相手の悪を批判せよ。

古今東西、勝者とは敵の屍に大義の御旗を突き立てる者だ。

織田信長は上洛の大義名分として、足利義昭の護衛を掲げている。

徳川家康は関ヶ原の戦いの大義名分として、「豊臣家のため」を掲げている。

また、戦争の規模によっては、旗ではなく、複数の勢力にまたがる大義の社を建てる必要がある。その為には、大義の土台となるべき理念や価値観の布石を、あらかじめ世界に配置しておくこと。いざ戦を始める際には、布石の上に柱を建て、社を建造する。自陣営の政略軍略に有利な理念および価値観の創出、維持、喧伝は平時から行うこと。

《政略と軍略》

政略は軍略を含む。政略が安定しない組織では、軍略も同様に不安定となる。よって、敵国内で政治的混乱を誘発することは、後の戦況を優位に進めるための必須条件となる。開戦以前に誘発できれば、敵国の政略は乱れ、不十分な軍備軍略のまま戦争に突入する。

政治に携わる者はこの関係を理解する必要がある。そして民主国家においては政府のみならず有権者も同様の知識が求められる。

《包囲された際には》

最強集団への対処

最強集団との戦いは極力避け、外交、政略を駆使して正面衝突を回避すること。最強集団の対立勢力と外交を結び、外部から牽制せよ。戦闘行為自体に戦略的效果を見出す場合は戦ってもよいが、絶体絶命、乾坤一擲、生きるか死ぬかの瀬戸際でない限り、勝利を目的として戦うことは絶対に避けねばならない。

最弱を撃破

包囲網には、必ず最弱の集団が存在する。自軍の勢力をそこに集中して撃破し、包囲網を破ること。包囲網に限らず、最も弱い部分を攻撃することは戦術の基本である。

中心勢力と各集団の見極め

包囲側における軍事、政治、経済、思想の中心勢力を把握すること。次に、各集団の強み弱みを見極めること。経済は強力だが軍事は脆弱という集団、軍事は強力だが包囲網を纏めるだけの思想は弱い集団など様々である。

包囲網の強点と自軍の弱点

包囲網の強点は軍事や経済などの統一行動である。よって、この動きを牽制することが肝要となる。次に、自軍にとって最も打撃となり得る統一行動に対処せよ。軍事面は精強だが政治面で不安定ならば、敵による政治的扇動や情報工作に注意すべし。

内部分裂

包囲網を形成するにあたっては共闘関係でも、本来は利害対立を抱えた集団同士である。例えばA国とB国間の利害を刺激すれば意識はそちらにも向かい、戦力は分散する。そこに弱点が発生すれば、自軍の戦力を集中してそれを叩く。

《多頭の巨獣》

貪欲な多頭の巨獣は眼前の敵ではなく隣の頭と争う。この性質を利用すれば3つの効果を得られる。

- 1、片方にも牙、つまり武力や経済力を向けるため、戦力が分散する。
- 2、資材や食料などの共有資源を奪い合い、さらにその一部を内部闘争に向けるため戦力を浪費する。
- 3、組織の統一性を失い、それぞれが互いの足を引っ張り、責任を押し付け合う。それによって、責任の適切な処理と問題点の検証が放置されてしまい、計画等の改善が行われないうまま、新たな戦局へ突入し、以前と同様の失敗を重ね、結果として敗北を招く。

巨大な組織には多頭化工作を施して分裂、独立、共食いを誘発し、内部からの弱体化を促進する。その後は各個撃破することで、自軍の戦力が小さくとも比較的優位に戦況を進めることが出来る。

《弱体化の方法》

相手が、本来反発しあう者同士の集団であった場合。

この種の集団は、内部闘争が激しいため、内圧が非常に高い。

何故まとまっていられるのか。それは、利害の共有は当然だが、なによりも、内圧以上の外圧が働いていることが、最大の要因である。従って、この外圧を減らせば内圧によって瓦解する可能性は高くなる。

例えば、**甲**は第一勢力であり最大数を誇る。**乙**は第二勢力であり、主義主張で反発しあう者が集まっている。**乙**は利益の共有と、**甲**の圧力に抵抗することで組織を統合してきた。従って、**乙**の分裂と自壊を誘発するには、**乙**の権益に打撃を与え、**甲**の外圧を低下させればよい。**甲**は意図的に勢力を減らした。そして**乙**が絶対数を増やし、相対的にも圧倒した。その結果、**甲**の外圧は消え、**乙**の内圧が一挙に高まった。かつての一致体制は、内部闘争へと様変わりする。各派閥で争う。水面下では攻撃できなかった主要人物も内圧によって浮上するため、彼らの姿が白日の下に晒される。彼らを各個撃破すれば、派閥や利権集団を弱体化させられる。こうして**乙**は、権益の縮小と高まる内圧によって統合原理を失い、事実上解体する。

組織と指導者

指導者とは何か。責任感と危機感を持ち続け、必要とあらば自己犠牲をも厭わない行動を果敢に選択し、敢然と実行する者。あるいは、責任回避と現実逃避に奔走し、常に他人を犠牲にして自己保身に走る者。

相反するような人物像ですが、どちらも指導者の典型的な特徴なのです。

その指導者ですが、国家国民、企業社員の中で緊張感や危機感が薄れると、厳しい生存闘争の社会ならば到底認められない基準で指導者を選ぶようになります。本来ならば、致命的な一撃に対する危機感と責任感と緊張感を有する人物こそが指導者の候補に挙げられるべきですが、慢心に浸った組織ではそれらの条件は疎んじられ、全く正反対の基準により、指導者として不適切な人物が選ばれます。そして、国家国民、企業社員は悲劇を迎えます。

指導者は大別して次の4つに分類されます。

- 1、平時と有事においても有能な人物。
- 2、平時は無能だが有事において有能な人物。
- 3、平時は有能だが有事において無能な人物。
- 4、平時と有事においても無能な人物。

どの人物を生み出し、どの人物を指導者を選ぶかで、集団の資質が明らかになります。集団の存続に関わる危機的な状況においては、特にその傾向が顕著となります。4を生み出し、4を選ぶ集団は4と同じく無能であり、1を生み出し1を選ぶ集団は1と同じく有能です。

優れた人々は優れた組織を生み出し、優れた組織は優れた人物を指導者を選びます。作戦や事業に失敗した場合、彼らは指導者のみでなく、組織、そして人々にも問題点があると考え、それらの検証を行い、改善を施し、次には勝利するのです。

劣った人々は劣った組織を生み出し、劣った組織は劣った人物を指導者を選びます。作戦や事業に失敗すれば、劣った指導者のみに責任を求め、組織や人々の落ち度は棚に上げるか認めようとせず、問題点を放置したまま同じような危機に直面し、敗北または滅亡するのです。

起こり得る致命的な一撃にどう対処するのか、ここに指導者と集団の本質的な力量が現れます。この一撃を軽視し、対策についての合意を得られない場合、遅かれ早かれ、その一撃によって滅亡します。軍事的脅威が致命的な一撃となるならば軍備や外交力に、自然災害がその場合は防災に全精力を費やすべきです。

これらの一撃を軽視する人物は指導者として3流であり、こうした人物を指導者に据える組織や人々は5流と言えるでしょう。

民主政治

指導者を選択する制度の代表例は民主制であり、21世紀前半の現時点では多くの国家で採用されています。

この民主国家では政治家と有権者の水準が正比例します。そして人間が自分の顔を肉眼では見られないように、有権者は自分自身を省みることが出来ず、政治家も同様です。よって己を知りたいならば相手の顔を見ればよいのです。いわば両者は鏡でもあるのだから。しかし、民主的に選ばれた政治家が批判されることはあっても、彼に投票した有権者が批判されることは滅多にありませんし、その有権者が反省することも殆どありません。

なぜでしょうか。

民意は無条件で正しく、そして正義であるという前提で、民主主義社会は成り立っているからです。有権者の資質や民意を疑うことは、宗教国家で神の存在を疑うことに等しいのです。ゆえに民主主義社会で民意の是非を問うことは制度の否定につながるだけでなく、一種のタブーでもあります。そのため、民主制度を採用している国家は、民意をそのまま受け入れるしかないのです、**例えそれがどのような結果になろうとも。**

民主政体における一票とは、選挙制度を構成する諸要素の一つに過ぎません。つまり、政治意思が法的な承認を受けて初めて一票となるわけです。よく言われる「一票は一票」との名言は端的に票の性質を表しています。ですから極端に言えば、猫の一票であろうと犬の一票であろうと、制度内で法的に「票」と見做されたならば、実態としての政治意思の有無や内容は必要とされないわけです。これは人間でも同様でしょう。例えば**秀才と馬鹿の政治判断を例に取りましょう。秀才の政治判断がどれだけ優秀であり、馬鹿の政治判断がどれほど劣悪であろうとも、一票という諸要素に変換され、結果的には等価値となります。一票という要素には、思索の蓄積も緻密な分析結果も反映されません。**つまり、秀才の一票と馬鹿の一票と犬の一票と猫の一票は、同じなのです。

私はここに疑問を感じます。例えば、熟練の職人が作り出した一単位の仕事と、未熟者の一単位の仕事は、当然同じ価値ではない。そこに投じられた経験や技術の差があるので、質にも差があることは誰もが理解できるからです。政治も本来はこれと同じはずです。一票そのものには、投票者の資質に応じて格差があるべきなのです。

最後に英国の名宰相ウィンストン・チャーチルの格言を紹介します。

「これまでも多くの政治体制が試みられてきたし、またこれからも過ちと悲哀にみちたこの世界中で試みられていくだろう。民主主義が完全に賢明であると見せかけることは誰にも出来ない。

実際のところ、民主主義は最悪の政治形態とすることが出来る。これまでに試みられてきた民主主義以外のあらゆる政治形態を除けば、だが」

統治能力と政府

政府とは統治を行う器官であり、それ自体が一つの生命体です。よってその目的は自己保存、つまり統治能力の維持となります。

国民の保護が統治能力の維持に繋がる場合は保護を行います。保護に伴う軍事的政治的衝突が統治能力の低下につながる場合は国民を見捨てます。また、ある情報の公開と共有が統治能力の維持に繋がる場合は実行しますが、情報の開示によって大規模な混乱が生じ、結果として統治能力が低下する場合は情報公開を拒絶します。

優れた戦国大名は支城の後詰に出るか否かを、統治能力の維持を基準に判断しました。つまり後詰に出たほうが統治能力の維持に益する場合は出陣し、後詰に出ない方が統治能力の維持に繋がる場合は支城を見捨てたのです。

指導者としての導命家は、常にこの観点を保ち、自己保存の原則を堅持しなければなりません。

支配について

- 1 まずは生命体のDNAを支配すること。
- 2 DNAは製造指図書であり、首脳はDNAに従って命令を下す司令部である。
- 3 細胞・組織・器官は下された指令内容に従って活動する。
- 4 首脳が入れ替わろうともDNAが同じならば大きな変化は生じない。
- 5 DNAが書き換えられた場合、首脳が同じであろうとも変化する。
- 6 DNAの書き換えは、細胞・組織・器官の拒絶反応を生む。
- 7 生命体の構成要素である人間の拒絶反応は心理的抵抗感である。
- 8 拒絶反応を無力化するには次の3点を用いるべし。
 - i 習慣化
 - ii 道德化
 - iii 不快感による自己抑制

習慣化及び道德化は3つの期間に分ける。

短期 初代 警察力と道德の強制

中期 次代 学校教育による道德の刷り込みと個人的習慣化

長期 三代 学校教育に加え、家庭・社会教育による集团的習慣化

ただし、i～iiiでも反応が消えない場合、拒絶反応が統治に与える損害の程度に応じて物理力を行使すること。

民衆

ここでは民衆について語りたいと思います。民衆は、一人一人であれば理性的でも、群衆の一部と化して思考する場合、輝かしい知性は曇りがちになります。彼らは、理性や論理や客観的事実ではなく、脳内に浮かび上がった心象風景への好悪感情に基づいて物事を判断するのです。ゆえに、現実の目的地が急峻な崖であろうとも、心象風景が緑豊かな草原であれば喜んで指導者に従います。そして冷静な者や自分で判断できる者が、この先は崖だ、地形から容易に判断できる、奴らは甘言を弄して君たちを騙している、などと警告しても嘲笑や悪罵を投げつけるのみで、一切聞く耳を持ちません。しかし、到着間近になってようやくおかしいことに気が付き、一部の者は騙されていたと騒ぎますが、殆どの者は訳が分からぬまま、谷底へ転落してこの世を去ります。

指導者として民衆を動かしたければ、第一に、特定の方向性を伴った心象風景を抱かせること。第二に、心象風景に対する好悪感情を継続的に生み出すための平易な論理を植え付けること。第三に、指導者は民衆の側にいると思わせること。

さらに付け加えるならば、欲望と恐怖を刺激することも重要です。

なぜならこの二点は、最快樂と最不快をもたらす為、容易に集団心理へと発展するからです。ひとたび大衆心理化された欲望と恐怖は、それ自体が世間の海流を生み出し、一人一人の構成員を無理なく目標地点まで運ぶのです。

戦争という生理現象

導命の視点で戦争や革命を俯瞰すれば次のように見えます。

知的水準の高い細胞が集まり何らかの情報交換をしている。細胞がそれぞれの所属する組織に戻った後は、それぞれの結合をより強くした。それまで強力だった部位はさらに強化され、貧弱だった組織は排除された。

別の動きも見える。古く、修復に手間取っている組織の細胞の中に、精神活動の活発な細胞が誕生した。その周囲に、同じ波長の細胞が集まって、新たな組織を組織内に作り出した。古い組織は免疫反応を起こして排除に乗り出している。攻撃型の細胞が新しい細胞を次々と殺している。

しかし新しい組織は強力だ。古い細胞膜や神経網や免疫系統を破壊し、古い細胞を殺している。新しい組織は強大化している。彼らの勢力に、古い細胞も加わっているようだ。

形勢は逆転した。

新しい組織が支配的な形質や神経網や免疫系統を獲得して古い細胞を排除し、または古い細胞のDNAを書き換えて新しい組織に順応させている。

この動きはヒト種器官全体に影響を及ぼすようだ。他の組織にも同様の反応が発生している・・・。

人間の世界は恒久的戦国時代であり戦争自体が消え去ることはありません。導命家はホモサピエンスとしての一般的な戦争観のみならず、「生理現象」としての戦争観で、国際社会を把握しましょう。

創造と破壊と成長

世界最高峰のエベレストを擁するヒマラヤ山脈は、インド大陸がユーラシア大陸と衝突した際に生まれました。海底が標高8000M級にまで隆起したのですから、衝突だけを見れば大規模な破壊です。

しかしながら、ヒマラヤ山脈の形成に視点を移せば、巨大な創造でもあるわけです。

つまり、ある種の破壊は、ただ壊れる、壊すのみでなく、同時に創造も司っていると考えられます。

この観点をヒト種器官内に当てはめるならば、戦争が該当するでしょう。

もちろん全ての戦争とは言いません。しかし、ある種の戦争を切っ掛けとして、古く支配的な細胞や組織が破壊されて新たな細胞や組織が支配権を確立し、地域の統廃合が行われ、技術革新が進むこともあります。

更に思いを巡らせば、アポトーシスに行き当たります。プログラムされた細胞死、のことです。これを戦争に当てはめれば、自殺に等しい無謀な戦い、と解釈できます。例えば、長篠の戦に於ける武田軍、そして西南戦争における西郷軍です。武田家が事実上滅亡したことで織田信長の天下統一事業が決定的となり、西郷軍が壊滅したことにより明治新政府の権力基盤が固まりました。

滅びゆく勢力に焦点を当てれば悲劇ですが、ヒト種器官または総命という全体的な視点から眺めれば、アポトーシスの戦争は、新たな形質を獲得するための創造的行為であり、生命体の成長と言えるでしょう。

富と権力

目的を達成するためには、現実的な力が必要となります。代表的な力とは、財力、そして権力です。ゆえに何か事を成し遂げたい、と渴望する者が、富と権力の獲得に時間と労力を費やすことは当たり前なのです。

一般的に、富と権力は「目的」となりがちですが、本来、富と権力は目的を実現するための「道具」や「手段」なのです。

人生の高みに登る事が目的とすれば、梯子は手段と言えるでしょう。しかしながら、多くの人は、梯子を手にした途端、本来の目的である高みに登る事を忘れ、梯子に掴まっている事が目的となり、やがて梯子もろとも腐敗します。最後は腐った段を踏み割り、惨めに転落するのです。またある者は、梯子を買うために金を稼いでいましたが、時が経つにつれて金儲けが目的となり、無駄な出費になるからと梯子は買わず、かつて憧れた「高み」には目もくれず、虚構のマネーゲームに没頭して生涯を終えるのです。

導命家は「目的」と「手段」を峻別し、自律ある行動をとらなければなりません。導命家の目的とは、総命を導くことです。その為に権力と富を手に入れ、意識と肉体を進化させるのです。進化に到るための手段に過ぎない富と権力に魅入られて、本来の役割を見失わぬよう注意しましょう。

どうしても富と権力に魅入ってしまうなら、次の事を思い出しなさい。あなたは御魂人が演じている登場人物であり、この世は舞台であるという真実を。富も権力も、畢竟、肉体の次元における価値に過ぎない、と。

(問) 戦争を肯定しているのですか？大変好戦的に思えるのですが。

「私は戦争について特に反対も否定もしませんでした。決して平和を拒絶しているのではありません。むしろそれを求めています。その一方で、平和は実現しないだろう、とも確信しています。

しかしながら、平和が実現せずとも、平和に近づくことは出来ます。これこそが導命家の、平和に対する姿勢なのです。

地球を平和に近づけるためには、ヒト種よりも強大な種による管理が必要です、圧倒的な軍事力と科学力による徹底した管理が、です。人間以上の存在でなければ人間と地球を管理できません。そのためにもホモサピエンスは進化せねばならないのです。我ら導命家には、平和に近づけるための力が必要なのです。その為には、多くの戦いを乗り越えなければならないでしょう。闘争を肯定する姿勢を見れば、平和からは程遠く感じるでしょうが、平和へ近づく唯一の道なのです。

確かに、新しい支配種である新種人の管理下でも、果たして平和と呼べる状態に到るかどうかは定かではありません。しかし、導命家は平和に近づくことを希求します。従って、新種人の支配が導命家によって実行されるのであれば、地球は人間が支配するよりも安全で過ごし易くなるだろうと確信しております」

(問) 平和を実現するならば、武器を手にとって戦うのではなく、話し合いを重ねることで平和を達成すべきではないでしょうか？

「賛成できません。平和が欲しければ、平和を実現できるだけの現実的な力を手にいれるべきです。それは富と権力です。声高に愛や平等、命の大切さを訴えても平和は遠いままなのです。声を上げることは大切ですが、それ以上に、富と権力を手にいれることに時間と労力を費やすべきです」

(問) 富と権力を手にしても、大抵の人は墮落してしまいます。導命家も他の腐り果てた支配者と同じ道を辿るのではないのでしょうか。

「その可能性は否定しません、ですから何度も次の言葉を繰り返しています。導命家は権力を目的としてはならない。権力とは、目的を実現するための道具、手段である。いわば、高みに登る事と、梯子の関係だ。多くの者が、梯子を手にした途端、本来の目的である高みに登る事を忘れ、梯子に掴まっている事が目的となり、やがて梯子もろとも腐敗する。最後は腐った段を踏み割り、惨めに転落する。手段に執着したことが原因で滅亡するのであれば、そもそも何のために梯子を手に入れたのかわからない。お前の目的は地球を平和へ近づけることである。その為の手段である権力によって腐敗せぬよう、心せよ、と。

権力とは支配するための手段に過ぎないのです。そしてその支配もまた、目的や理念を実現するための手段です。重要なことは支配を通して具現化される社会と理念なのです」

指導者の心得

「心得」

- 一、国家、企業、民族など、ヒトによって構成された集団や組織はすべて生命体である。
- 一、各種生命体の生体構造と生存闘争の原理は、ヒトや動物と同様である。
- 一、国家、企業、家族など、己が率いる集団を一個の生命体と認識し、己と集団の生命を一体化せよ。
- 一、国史、民族史だけでなく、生命史の観点からも判断せよ。
- 一、生命体の誇りある存続を希求せよ。
- 一、あらゆる分野が恒久的戦国時代との認識を魂に刻印せよ。
- 一、生存圏の獲得、維持、拡大、発展を己の役割とせよ。
- 一、生殺与奪権を巡る闘争に邁進せよ。
- 一、敵から一瞬たりとも五感を逸らしてはならない。敵は虎視眈々とこちらを狙っている。
- 一、緊張の緩み、疲労、慢心、無関心がもたらす結果は、汚辱に塗れた敗北と滅亡である。

「指導者の役割と孤独への耐性」

指導者としての導命家には、生命体の各部分の希望や要望に耳を傾けつつ、己の主義信条を主軸としてそれらを整理調整し、理念化した全体像や青写真を示すことが求められます。理念や将来像を共有することなく特定の事業に邁進しても、部下や民衆はついてきません。

理念の実現は、部下を用いて行うこと。事業の遂行と実現に必要な能力を見定め、基準を設け、それに基づいて部下を抜擢し、適所に配置する、または部署を新設する。全てを自分でやろうとしても、大抵は失敗します。それは、大天才や大人物だけに可能な異業なので、大部分の凡庸な指導者は共同作業を心掛けるべきです。

部下に任せたとしても能力が到らねば、例えあなたの身内や親友であろうとも、断固として切り捨てなければなりません。不適切な場所に不適切なモノが存在すれば血行不良や機能不全を起こして周辺が壊死する可能性があります、それでも切り捨てることを躊躇すれば、生命体そのものが息絶えてしまいます。

組織を運営していると、強敵を攻め滅ぼすよりも、一人の身内を切り捨てる方が難しいことに気がつきます。情と目的意識の相克に苦しむことは、指導者に課せられた宿命です。大事業を為した指導者は、不要な情を切り捨て、目的意識を一貫して優先し、強力な生命体を形作ることに成功しています。武田信玄然り、織田信長然りです。

あなたの組織が大きければ大きいほど、身内に注意しなければなりません。

一族はあなたを護る最高の盾であり、また同時に、あなたを狙う身近な矛にもなり得ます。

身内でさえ敵となるのですから、側近への警戒も当然怠ってはいけません。

ゆえに指導者は、恐れられ、愛され、そして尊敬される必要があります。

そのためには、部下に対する生殺与奪権、具体的には賞罰の権限を死守しなければなりません。ヒトは賞を喜び、罰を恐れます。よって、賞罰を定める人物を愛し、そして恐れるのです。

「妬みやっかみ」

組織を運営する際には大なり小なりあれこれと気を使いますが、意外に見落としがちなのは、部下の妬み、やっかみです。ある部下への報奨が、他の部下の嫉妬を生み、結果として内部統制に悪影響を及ぼすことがあります。また、妬みが直接の動機となって、想定外の行動に走る者も少なくありません。

指導者は、こうした感情を牽制し、統御し、時には利用するという態度を持たねばならず、常に注意を払っていなければならないのです。

「内なる敵」

危機感と緊張感と責任感の欠落した味方は、悪意と敵意と殺意に満ちた外敵よりもはるかに邪悪で有害な存在であり、もはや内なる敵といってもよいでしょう。このような人物は捨て駒として利用する以外に対処法はないのです。

「孤独」

孤独に陥るような精神構造の持ち主は指導者に向いていません。

そもそも指導者に友は必要ないのです。必要なのは優れた部下と運ですから。

「恐れを知ること」

指導者とは勇敢で頼もしく、恐怖をものともしない堂々たる偉丈夫、とのイメージがあります。確かに、そのような人物であれば、誰しもがついて行きたくなります。外面のイメージはそれでよいと思いますが、彼の内面までもがその通りであれば、一時的に覇道を唱えるでしょうが、やがてはその気質が仇となり没落するでしょう。勇敢過ぎる指導者は、却って危ういのです。

指導者は恐怖に敏感な方が良いのです。優れた指導者ともなれば、その恐怖を母体にして、良質の精神状態を生み出します。恐怖は危機感を生み、危機感は緊張感を生み、緊張感は責任感を生み、そして責任感は勇気を生むのです。

この勇気は本物です。なぜなら、危機感や恐怖が根底にあるので、撤退すべき時は躊躇なく撤退します。しかしながら、勇気だけで構成された勇気は撤退すべき時に撤退せず果敢に突撃します。そして玉砕します。

どちらが指導者として優れているか、自ずと明らかでしょう。

弱者救済

生きる意志はある。法を順守し、労働を愛するが、不可抗力の事情によって生活が成り立たない

。

このような者を弱者と呼びます。

富と権力を有する者は、彼らに手を差し伸べなければなりません。

神々は、あなた達の金銭欲と支配欲を満たすために富と権力を授けたわけではない。

神々は、八百万の道のためにその力を与えたのです。

弱者の中に埋もれた才能を見出し、各人に与えられた能力を伸ばし、八百万の道を歩ませなさい

。

文化経済圏

指導者としての導命家は、経済を語る際に、まずは文化そのものを生命体として認識することから始めなければなりません。

文化とは一つの生命体です。その実体は生命体を構成する細胞、即ちヒトの生活様式で現され、生活様式は衣食住遊の型によって定まっています。そして経済の基本とは、この型を満たすことなのです。

生活様式の型が変化すれば、生產品の種類や材料にも変化が生じます。例えば、タンパク質の遺伝コードを別のコードに書き換えれば、新たなタンパク質が継続して作られるように、生活様式のコードを特定文化のそれに書き換えれば、その型を満たすための経済構造へと変化します。

従いまして、自文化の様式の拡大は自経済圏の拡大へと繋がるわけです。私はそれを、文化経済圏と呼んでいます。このように、文化の輸出と貿易は唇齒輔車の関係なのであります。

さて、コードの書き換えについて申しましたが、気付かぬうちに文化のコードを書き換えられていることがあります。

他国と交流を続けているうちに、いつのまにか、国民や民族の価値観、美意識が他国のそれに感化され、伝統的に生産、購入、消費していた製品ないしは商品が見向きもされなくなり、気がつけば他国の製品を生産、販売し、人々は疑うことなく他国の製品を手に取り自国の伝統を捨て去ります。そして恐ろしいことに、はっと気がつけば、自分たちは他国の経済支配下に置かれ、周りを見渡せば、先祖代々継承してきた共同体が見るも無残に崩壊していることもあるのです。あるいは「書き換え」の途中で事態に気がつき、自分たちの型を守ろうとする免疫的な反応が生じることもあります。

細胞を巡る現象にも似たようなことがあります。レトロウイルスです。いつの間にか、従来のコードが書き換えられ、異質の蛋白質がどんどん生産されるわけです。

これが長期間、静かに進行すれば人体の一部、つまり文化の一部となりますが、過度に到ると文化的身体の拒絶反応を引き起こし、免疫機能が作動して駆除されます。

以上が生命体という観点からの経済論ですが、もう一点だけ、文化経済圏に関して述べたいと思います。

文化経済圏は、包括的な世界観や物語を大地としています。長期的な経済支配を実現したいのであれば、大地となる世界観を創造する必要があります。この構造を軽視する者や気付かない者は、常に創造者の後塵を拝するだけです。たとえ追いつき追い越したとしても、彼には包括的な世界観、物語、哲学、美意識、そして新しい概念がないため、主導的な物を生み出せません。ゆえに、世界観の創造主が新たに開拓・開墾するのを待つしかないのです。人々は、商品を通じて

世界観や物語の一員となることを喜びとしているのですから。

指導者としての導命家、特に経済政策に関わる省庁や世界的な企業の幹部は、この視点を常に意識することが求められます。

時代を創る者たち

時代が飽和に近づくと、あちら此方に新時代の種子が現れます。

霊感的閃きと卓抜した感受性の持ち主が、幾数多の種子の中から未来の芳香を嗅ぎ取り、果敢に掴み取るのです。新時代の種は、感性の鈍い者、鼻の利かない者、興味が無い者の目の前を、たんぽぽの綿毛の如く漂うこともあります。彼らは絶対に気付きません。

むしろ新時代の種子に気づいた人々を嘲笑します。

「あいつらは馬鹿げたことに熱中している狂人の類だ」と。

あらゆる時代は、新時代の種子に気付いた者から始まります。

私は彼らを先見性のある者、先見者と呼びます。

先見者の中で、新時代の種子を握りしめ誰よりも早く未来へ駆けた者、これを先駆者と呼びます。

先駆者の中で、新たな時代の生存圏を切り開き、そこに種子を播き、新時代の萌芽まで至った者、これを開拓者と呼びます。

開拓者の中で、支配的な栽培・剪定の型を創造し、開拓地に新時代の花を咲かせ、時代の象徴となった者、これを創型者と呼びます。

創型者によって作られた時代や分野の型が成熟あるいは飽和に到ると、あちらこちらに新時代の種子が現れます。それに続いて新たな先見者、先駆者、開拓者、そして創型者が生まれるのです。

自分自身が如何なる者なのか、じっくりと考えてみて下さい。

あなたは先見者か、先駆者か、開拓者か、創造型者か、あるいは嘲笑しているだけの凡人なのかを。

天才秀才そして凡才

《天才》

天才は、型のパターン認識に優れ、超人的な執念で事業に取り組み、靈的な閃きに満たされ、従来の支配的な型には採用されていない新しい要素を組み合わせて独自の強力な方法を考案し、その分野に支配的な型を創造します。

天才の人物例は、北条早雲と織田信長です。早雲は領国大名という型を作り出し戦国時代の幕を切りました。信長は、貨幣を基軸とした傭兵制と鉄砲の集中使用による戦法というその後の支配的な型を創出しました。

天才と凡才との大きな違いは、取り組みに対する執着心といえるでしょう。

凡才ならば早々に見切りをつけて諦める場合でも、天才は執拗に挑み続けます。ゆえに凡才にとって、天才の執着心は狂気と映るのです。

観方を変えれば、凡才に狂気と罵られることは、天才的偉業へ近づいているかどうかの指標とも言えるでしょう。

ゆえに凡才からお前はおかしいだの、狂ってるだの言われることは、名誉なのです。

導命家の諸君がなんらかの事業に取り組んでおり、凡才から狂気を指摘されたのなら、自信をもってそのまま続けなさい。

ただしそれが成功するかどうかは、あなたの力量と運次第です。

《秀才》

秀才は型の性質や構造をよく理解し、その範囲内で優れた働きをします。自ら型を創造することはありませんが、必要に応じて型を改良する技に長けています。

天才の型が広く行き渡るか否かは秀才の力量に依るところが大きいのです。織田政権下における明智光秀と羽柴秀吉、そして豊臣政権下における石田三成が秀才に当たります。

秀才が大きな力を持つのはだいたい安定期です。

文化などがのびのびと成長する良い季節だと言えますが、変化を好む人たちにとっては、極めて退屈な冬の時代とも言えるでしょう。

《凡才》

凡才は型を創造したり改良することは殆どなく、天才と秀才によって創造、整備された型に従います。

型への順応は天才や秀才に比べて容易です。初めは多少戸惑いつつも、その時々々の型に自分を合わせる事が出来ます。

社会や政治の型を例にとりましょう。

宗教主義社会では神を信じ、経典に従う。

民主主義社会では自らの主権を声高に叫ぶ。

軍国主義社会では好戦的スローガンを高らかに唱え、正義の名のもとに人を殺す。

平和主義社会では朗々と平和を賛美し、戦争を憎み、軍隊を罵るのです。

凡才は型を創れませんが、どのような型にも収まる事が出来るため、時代が変わっても生き延びます。

天才は型を創りますが、他の型に収まる事が出来ないため、時代が変わると滅亡します。

これもまた、天才と凡才の大きな違いと言えます。

《天才的偉業》

天才の偉業とは、本人の力量だけで為し得るものではありません。

合同作業の賜物です。

北条早雲の場合は、応仁の乱によって室町幕府体制の統治能力が著しく低下していました。

織田信長の場合は、早雲の築き上げた領国大名という社会の型が既に存在しており、更には鉄砲という道具も実用化されていました。そして貨幣経済も高まっており、彼は経済都市の尾張で育ちました。

これらの複合的な組み合わせによって、彼らの偉業は達成されたのです。

これは現代科学にも言えます。基礎研究の確立、最新の実験器具、タブーの緩和、社会的要請などの諸条件に、天才科学者の優れた知能や発想が組み合わさって、いわゆる天才的な業績が誕生するのです。

これとは逆に、天才的才能が孤立している場合は、その時代の無知や偏見に埋もれ、後世の手によって発掘されることが大方の運命です。

《天才の遺伝子》

天才とは一代限りの存在なので、子や孫が天才と云う可能性は殆どありません。

天才の技能と発想は、本人の特殊な性格や、秀才凡才には到底耐えられない複雑な精神を土壌としているため、仮に子孫が天才の技量を受け継いだとしても、天才と同じだけの性格や精神が備わっていなければ、ただの「才人」として終わります。さらには時代の要請と合致する必要がありますので、技量と精神を受け継いでいても時代とすれ違えば「天才」とは呼ばれず「奇人変人」として生涯を終えるでしょう。

その点、秀才は違います。

秀才の技量は血統的な蓄積による場合が多いので、子孫が秀才の技量を受け継ぐことは一般的です。

そして、両親ともに秀才であればその確率は非常に高まります。

役割や仕事に邁進する

導命家の主な目的は総命を導くことであり、その手段として自らを進化させるわけですが、それ以外にも目的はあります。

今生を**幸福で充溢**させることです。
これもまた、重要な目的なのです。

では、生涯を幸福感で充溢させるにはどうすればよいのでしょうか。
答えは大変明快です。
自分の役割を果たすのです。

役割を果たすためには、まず自分の役割を知ることが肝心となります。
では、その役割を知るためにはどうすればよいか、それについて説明しましょう。

御魂人としてのあなたは、手ぶらで今生に現れたわけではないのです。
魂界で選ばれ、生の門をくぐる際に、今生を実りあるものとするための道具を持ってきているのです。
それは何か。

「才能」と「能力」です。

才能と能力は、役割へと繋がる道標となります。**能力は役割を示唆し、才能は役割を明示**しているのです。

例えば、弁舌に長けた者は、広く聴衆に訴えることが役割です。頭脳が明晰で、実務能力に長け、なおかつ忠誠心の高い者は、組織に属して手腕を発揮することが役割であり、神意に適う誇り高い仕事なのです。

役割に従事するに当たっては、当然ながら成果が求められます。よって無能な者はその分野で排除されます。そして当然ながら、苦手な分野でいくら努力しても結果は思ったようについてきません。各分野で成功している人が才能や能力を活かせる場所にいるように、あなたも自分に適した分野を選ぶことが大切なのです。

もし好きな分野と才能・能力が違った場合はどうするのか、ですが、心配は要りません。本当の才能は分野と一致するからです。その才能は、御魂人が今生で活かす為に持ってきたわけですから、持ち主は、それを活かそうと渴望するのです。

歌唱の才能がある人は人前で歌うことを求め、演技の才能がある人は自然に舞台を求めます。

神々から授けられた才能は、芸術やスポーツの場合の様に、一見して明らかなものばかりではありません。普段人目に付きにくい部分にも才能は活かされます。

それは、「**才能を見抜く才能**」「**才能を育てる才能**」「**才能を活かす才能**」いわゆる名伯楽のことです。

これらの才能は、芸術家やスポーツ選手ほども注目されませんが、実は大変重要な才能なのです。

戦国時代の名将は、人物の才能をよく見抜きました。そして彼らの力を借りて幾数多の戦に勝利し、その名を後世に残しました。

例えば武田信玄は農民出身の高坂昌信を取り立て、織田信長は足軽出身の藤吉郎に目を掛け、羽柴秀吉は茶坊主だった佐吉、後の石田三成を召し抱えました。

これが「**才能を見抜く才能**」です。

登用後は彼らを厳しく育て、見事な戦国武将を作り上げました。

これが「**才能を育てる才能**」です。

その後は彼らと共に戦場を駆け、その名を天下に轟かせました。

これが、「**才能を活かす才能**」です。

あなたが今生で事を為したければ、これらの才能を鍛えあげることが最も重要となります。そして、あなたが才能を育てたい、才能ある人に出会いたいと渴望しているなら、それはあなたの今生での使命であり、神々に与えられた役割なのです。

才能に関して述べましたが、皆が皆、才能を持っているわけではありません。これといって才能がない者や、特にやりたいことが見つからない者もいます。そうした人々は、自分の能力を見出してそれを磨き、労働や奉仕活動を通じて社会に活かすことが大切です。ヒトは程度の差はあれども、必ず何らかの能力を持っているのです。例えば平凡なサラリーマンには、一つ所で地道に懸命に仕事を続けるという重要な能力が備わっています。この能力を馬鹿にしてはいけません。従業員が安定してその場にいるからこそ、企業は実体を保つことができるのですから、資本主義社会を支える大切な能力だと言えます。

さて、ここまでは才能と能力を区別して書きましたが、双方には共通点があります。それは常に修練を必要とすることです。

実が生らずとも、花が咲かずとも、陽が当たらずとも、水は適度に与え、剪定を行うことが肝要です。

必ず何らかの形で役立つ時が来ます。

《役割を巡る問答》

(問) 私はある分野に関して才能を持っていると自負していますが、周囲とはどのように関わればよいのでしょうか？

「**才能ある導命家は一本の樹木**です。豊かに実が生り、樹液があふれ出ている。それを求めて、多くの者が集まってくる。総命の成長を促進するための刺激となり、養分となるならば、あなたを慕う者に果実を与え、樹液を提供しなさい。あなたの才能を、総命の成長に活かすことは、あなたの義務であり役割であり、かけがえのない幸福なのです」

(問) 戦国期は才能の持ち主が大活躍できた時代ですが、現在の日本社会は才能を否定的に捉えています。

「才能を否定する社会は不健全です。遠からず衰亡するでしょう。社会に活力を取り戻すためには、才能ある者が中心核となって、細胞、組織を形成することが大切です。そこでは、様々な種類の才能が有機的に結合し、一つの生命体を形成します。様々な才能の中でも特に重要なものは、才能を見抜く才能、才能を育てる才能、そして才能を活かす才能です。名を成した戦国武将は、これらの才能に秀でています。武田信玄は高坂弾正を、織田信長は明智光秀と木下藤吉郎を、羽柴秀吉は石田三成を選び、戦国時代を駆け抜けました」

(問) 私には才能がなく、能力も乏しく、周囲の人々は私の遥か頭上に君臨しています、そのため卑屈になってしまい、ご飯が美味しくありません。

「上ばかりを見ていると首が疲れますのでたまには前を向いて首を休ませましょう。そして自分自身に目を向けましょう。上位の人たちと自分を比べてその格差に落ち込むのではなく、あなた自身の100%を目指しなさい。周囲ではなく、あなた自身と比べなさい。本来ならば100メートル登れるはずなのに「私は周りに比べて駄目な奴だ」といじけてしまい、30メートルで諦めているならば、まずは100メートルを登れるようになってから上位の人々と比べなさい。自分と向き合い、自分と戦うのです。ここで自分に負けてはいけません。上を目指すなら、あなたは自分に勝利しなければならないのです。**なぜなら、自分との勝負に勝てぬ者は、他人に勝利するどころか、勝負する資格すらないからです**」

(問) 私は微力だ、あまりにも無力だ、もう死んでしまいたい。

「巨大な光とは一つ一つの光子が集まることで成り立っています。光子一粒の光量は僅かな存在ですが、それを悔んだりすることに意味があるのでしょうか。結果としてその場所を煌々と照ら

すことに繋がれば、自分の役割を果たしたことになるでしょう。あなたも自分だけの力量を嘆かず、結果として大事業に繋がっているかどうかを意識しなさい」

(問) 私は今生に於いて何をすべきか分からず、不安でたまりません。

「若き導命家よ、私は知っています、あなたには音楽の才能があります。神々が、今生で役立つようあなたに授けたのです。それを活かすことは神意に適います。その代り、それを活かさず怠惰に過ごすことは、神々に対する反逆と知りなさい。

あなたは曲を作り、演奏し、聞く者の情操を豊かにし、脳の進化に貢献しなさい。あなたの音楽を聴いた者が、新たな芸術に目覚め、例えば文学や絵画を生み出し、それが人間の奥深い感性を揺り動かして進化を助けることに繋がるかもしれません。嗚呼若き導命家よ、まだ迷っているのですか！あなたが魂界にいる頃、神々は音楽の才能をあなたに授けました。あなたはその才能を携えて生の門をくぐり、肉体をまとい、名を貰い、そして今生に存在しているのです。

若き導命家よ聞きなさい。この世に生れ落ちて仕事を放棄する者は、舞台に立ちながらも、全く演技をしない怠惰な役者のようなものです。早々に舞台から立ち去らねばならない。観客にとって目障りだから。真剣に演じている役者にとって迷惑だから。観客は神々であり、真剣な役者は導命家なのです。

役割に邁進すること、そして役割を遂行することに意義があるのです。八百万の道のために戦う者は、勝利しようと倒れようと、役割を完遂した者なのです。

優れた導命家は、混迷の世に於いても己の役割を奉じ、それに邁進します。

優れた導命家は、宇宙における自分の存在意義と価値を知っています。

八百万の道を知った者は、仕事の価値を、他者との比較によって判断せず、自分に与えられた役割との比較によって是非を問い、価値を判断します。

他者と比べて劣っていても、自分の役割を十分果たしていれば彼は完遂者です。他者と比べて優れていても、自分の役割を十分に遂行できていなければ、彼は未熟者なのです。

導命家よ、生活と仕事を八百万の道に捧げなさい。本来のあなたは、役割を果たすために生の門をくぐり、肉体をまとい、名を授かったのです。しかしながら、あなたは怠惰に過ごし、惰性に流れ、覇気もなく、才能と能力を省みない無分別な仕事に従事して結果が出ないと嘆いている。

あなたが生まれてくる前、まだ魂界にいる時、神々の前で誓った力強い言葉を思い出しなさい。煌く宝石のような決意を蘇らせるのです。たとえ役割のすぐ後ろに死の門があろうとも、決して躊躇せず、誇り高く飛び込みなさい。その門をくぐると同時にホモサピエンスの肉体を脱ぎ、役割を完遂した御魂人に戻るだけです。

導命家よ、生きることが役割なら生きなさい。死ぬことが役割の完遂に繋がるなら死を選びなさい。どちらもあなたにとって正しく、そして名誉なのです。御魂人のあなたにとって、肉体は役割を遂行するためにまよっているのだから」

欲望の大河

導命家はいつの時代においても澆刺とした生命力を発揮し、内なる光明をより輝かせ、大いに、堂々と生きてゆくわけですが、それだけの活力を得るには、生来備わっている精神力だけでは足りません。

ではどうすればよいのか。

「欲望を上手く利用する」のです。

さて、その欲望ですが、この世で欲望ほど毀誉褒貶に晒されている存在はないでしょう。

ある集団の価値観では、欲望は人間を墮落させる悪魔の使いだと考えこれを拒絶しようとしめます。

また別の集団では、欲望とは魂の質を上昇させるエッセンスと見做してこれにどっぷりと浸ります。

これらは極端な例ですが、欲望に対する考えを知る上では良い例だと思います。

では、導命の場合、欲望をどうとらえているのでしょうか。前述の例に倣えば悪魔の使いとして拒絶するか、あるいはエッセンスとしてどっぷり浸りきりするのか、となりませんが、どちらでもありません。

導命では、欲望を退けず、また奉戴しません。

導命では、**欲望を認め、治め、活かす**。

この三法を基本的な態度としています。

欲望とは、いわば水であります。誰しものが源泉を持ち、そこから「こんこん」と湧いているのです。

まずは、その水を認めます。そこに水があります、と素直に受け入れるのです。

認欲（にんよく）であります。

次に、その認めた水を、治めるのです。

治水、つまり**治欲（ちよく）**となります。

最後は、普通だと欲を「満たす」となるものですが、これは違います。

欲を「活かす」のです。

活欲（かつよく）です。

この活欲について説明しましょう。要は、「欲望を満たすために必要な手段、仕事、作戦などに焦点を当て、それらにエネルギーを注ぎこめ、そうすれば欲望は自然と満たされる」というわけでありませう。

活欲の優れている点は、手段や作戦の遂行に必要な忍耐力、精神力、集中力、そして閃きを次々と生み出してくれることです。

単なる賃金労働なら3時間もせずに疲れ果てる男でも、惚れぬいた女を口説くための金ともなれば、日勤と夜勤を掛け持ちすることもあります。さらに彼は疲れを見せないのです。なぜなら頭の中は女性とのセックスで占められていますから、脳内麻薬が出っぱなしで疲労を感じないのですね。

この男は無意識のうちに欲望を活かしていましたが、導命家は意識的にこの欲望を活かすのであります。

さて、ここまで書くと、欲望悪玉論者がこう言うわけですね。

「欲望を活かそうとも、その過程で周りに迷惑をかけたたり、破壊的な行動に出る者もいる。その原因は欲望だ。やはり欲望が悪い。欲望を持つべきではない」

これは違ひます。欲望が悪いのではない。

欲望に基づいた振る舞いや、その振る舞いが与える社会的な影響が問題なのです。

例えば購買欲の減少から〇〇離れが生まれ、〇〇離れから消費低迷へと繋がり企業業績は悪化、結局は不況、そして失業者の増加となります。あるいは性欲の減少にしても、これはセックスレスを誘発し、セックスレスは少子化へ繋がり、少子高齢化社会の一因ともなっています。

しかし欲望悪玉論者は諦めずにこう叫びます。

「欲望によって墮落した者が存在する以上、欲望は悪だ、欲望を禁じねばならない、退けねばならない！」

ではこう答えませう。欲望を活かすことによって成功した者も存在する。例えば豊臣秀吉などがそうだ。

欲望に引きずられて墮落する者は、その人の意志が弱いからにすぎない。

意志が強ければ墮落なんてしません。成功するしない、迷惑をかけるかけないは、あなたの振る舞いの結果なのですから。

自分のそうした弱さを認めず棚上げし、欲望に責任転嫁するとは言語道断です、あっちへ行きなさい、目障りです。

さて、欲望悪玉論者が退散したので少しばかり視点を移し、欲望の河川を見てみましょう。滔々とした雄大な流れです。素晴らしい大河川、つまり大欲であります。

おや、あそこで欲望におぼれているのは、先ほど禁欲の素晴らしさを説いていた欲望悪玉論者たちではありませんか。ああ沈んでしまった。素直に認めていけばよいものを。あれは、何をしているのだろう、欲望の流れを堰き止めようとしているのか。しかし、堰き止められた欲望の水は、アブノーマルな別の方向に流れ出してしまったぞ。ああその流れに彼も巻き込まれてしまった。欲望を無理に堰き止めず、素直に治水すればよいものを。

まあよいです、あのような者たちの行方など。

それでは最後に、導命家諸賢に伝えておきたいことがあります。

大欲の大河川に関してです。

大河は治水を施さねば、絶えず氾濫を繰り返しますが、適切な治水を施して活用すれば、その流域に偉大な文明をもたらします。

大欲もそれを放置すれば周囲に甚大な被害を与えますが、意志を以てこれを治め活かせば、非常に有益なものとなります。

あなたが大欲の持ち主であるなら、無理に否定しない方が良い結果を生むこともあるのです。自分自身を源泉として湧き出る欲望の水量と流れの速さを見極め、欲望との距離を適切に測り、生涯をよりよく過ごすために役立てましょう。

(問) 私は欲望悪玉論者だ。欲望を肯定するお前が許せない。

「欲望悪玉論者よ、聞くがよい。生存欲。これが至高欲である。次に食欲、性欲、闘争欲、排泄欲、睡眠欲。これが五大欲である。これに金銭欲、所有欲、支配欲、名誉欲、自己顕示欲が加わり、十大欲となる。

私が欲望を肯定するのは、進化のためである。進化を実現するためには、政治、軍事、経済、芸術、教育、工業、科学などすべての分野において指導力を発揮し、地球資源を進化に投入せねばならないため、猛烈な行動力が必要となる。行動力には猛烈な原動力が必要であり、その一部として欲望がもたらす快樂を利用するのである」

(問) 欲望から逃れてこそ、人間は幸福な人生を送れるのだ。

「地上にいて重力から逃れられないように、肉体をまとして欲望から逃れることは非常に難しい。重力を前提として建築するように、欲望を前提として生活することが、幸福への第一歩である」

」

(問) 導雲よ、お前は欲望を退けることに成功した聖人君子なのか。

「私は聖人君子ではなく一人の導命家である。自らを律する者にとって、欲望とは太陽であり、月であり、風であり、水であり、大地である」

(問) 導雲よ、お前は欲望を隠さぬ恥知らずだ。

「欲望を賤しく思う心こそ恥じである。私は欲望と同衾しながらも意志を保つ。なぜなら私の意志は欲望の上に成り立っているからだ。自らを律することが出来ず、欲望を恐れ、憎み、恥じる者よ。お前のように欲を離れなければ意志を保てない弱者は欲望から離れるがよい、もしそれが可能であるならば」

(問) 稀代のペテン師め。お前から支配欲の腐敗臭が漂っているぞ！

「私にとって支配とは手段である。支配されることを恐れぬ者、支配されることを通して支配することを知っている者は、私から光の芳香を嗅ぎ取るであろう」

(問) 口舌の徒め！見え透いた欺瞞の二重螺旋がお前を形作っているのだ！お前も導命家も、権力と快楽の吸引力に抗しきれず、いずれは腐敗するだけだ！

「私には、権力によって腐敗し、快楽の泥濘に絡め取られるだけの時間は残されていない。しかし、後世の者の中には、そうした類の敗北者が現れるであろう。そして彼らは生命の掟によって宇宙から消滅するであろう。ただそれだけのことに過ぎない」

歴史という物語

この世は物語の複合体であり、物語は脳の数だけ存在します。意識しようとしまいと、誰しものが何らかの物語に準じて考え、行動しています。つまり物語とは、御魂人があなたという登場人物を演じるための脚本、と考えてもらえればいいでしょう。

物語の種類は多岐にわたります。神様は存在する／しないという物語、死後の世界は存在する／しないという物語、魂は存在する／しないという物語、人間は尊い存在という物語、人間は生まれながらにして罪深いという物語、全ては物質によって作られているという物語、人間の歴史は階級闘争の繰り返しという物語、DNAは偉大な存在が作ったプログラムという物語、あらゆることは幻覚に過ぎず実際は何も存在しないという物語等々。

そして、高次方程式や軍隊のように、大きな物語には中規模の物語が幾つか収まり、中規模の物語は小さな物語、いわばエピソードとでもいうべき様々な出来事で成り立っています。ある者は大きな物語を脚本とし、またある者は中規模の物語を脚本とし、そして別の者は小さなエピソードを脚本として人生を全うするのです。

物語の中で最も強力な部類に属する存在が、いわゆる「歴史」です。歴史とは作り話であること、何者かによって都合よく解釈された勧善懲悪の物語であることは、それこそ歴史の常識でしょう。

それを踏まえた上で、私の考える歴史像を紹介したいと思います。

〈歴史を作る者 (history maker) 〉

歴史を解釈する権利は、戦争の勝者、即ち支配者にのみ与えられている。そして、支配者に都合よく解釈された歴史が、所謂「歴史」と称される。つまり歴史とは、支配者によって紡がれた勧善懲悪の物語であり、支配者とは物語を作り出して制定する者、history makerなのである。

被支配者は、新たに制定された歴史を素直に信じるか、あるいは信じることを強要される。歴史の正当性や事実を疑うことは許されず、疑った者は世間から糾弾され、法的に罰せられ、場合によっては殺害、または処刑される。

歴史観の強化は、そのまま支配権の強化に直結するため、支配者は定期的に歴史観の保定作業を行う。戦勝記念セレモニーはその好例である。保定のみならず、場合によっては修復、改修も

行う。

次の時代を創る者は、総じて新たな物語を準備し、その内容は、現統治者の正当性を否定、または疑問視した構成となっている。そして新たに支配権を確立すると、前任者とまったく同様の手法を用いる。つまり、己の物語を歴史と称して大衆に啓蒙または強要し、セレモニーを定期的に行い、物語の真実性や正当性を疑う者を処罰する。その後、新たな勢力が新たな物語を掲げて台頭し、これとの戦いに敗れ、悪逆非道の人物として新たな歴史に取り込まれる。

もしかすると、あなたは知らないうちに、歴史という手枷足枷を嵌められているかもしれません。一般人は、歴史という創作物が真実であると勘違いしていますが、導命家であるあなたは、歴史から自分自身を解放しなくてはならないのです。手枷足枷を外して自由になった後は、新たな物語を紡ぐのです。それがあなたの役割なのです。その為にあなたは肉体をまとい、名を授かったのだから。

食事

人間の性質はまことに複雑で、草食的な者もいれば、肉食的な者もいます。それはまるで、虎が肉を喰らい、馬が草を食むようなものです。

ですから、あなたが肉食したければ肉を食べなさい。
肉食が嫌なら菜食を実行しなさい。

大切なことは、あなたの心身に良いものを選択することです。
あなたが肉食だからと言って菜食者を差別してはいけない。
あなたが菜食者だからと言って肉食者を批判してはいけない。

虎の肉食を批判する馬はいない。
馬の草食を軽蔑する虎はいない。

肉食の結果、その人が役割を遂行できないなら、役割を果たせないなら、その人の肉食を批判しなさい。
菜食の結果、その人が仕事を遂行できないなら、目標に到達できないなら、その人の菜食を批判しなさい。

食事も呼吸も睡眠も、全ては役割のためにあるのです。

世間

私は余暇を利用して、風見人間の街へ出かけました。そこに住む人々の頭や首は、まるで風見鶏のように薄っぺらく、世間の風に従って、右にも左にも、過去にも未来にも、ありとあらゆる方向にクルクルと回転しておりました。

そうした街並みの中で、ただ一人、人間の頭をまっすぐに支え、目を見開き、力の限り叫んでいる若い導命家と出会いました。

私は彼の主張が気に入り、じっと耳を傾けてみたところ、彼曰く・・・

世間とは、衆愚どもが無節操に喚き散らす陋劣を極めた意識の寄せ集まり。

時代とは、衆愚どもの短絡を極めた尽した条件反射運動。

歴史とは、時の権力者によって都合よく咀嚼され、弛むことなく尻の穴からひねり出される連続した汚物。

まさに捨て身の叫びでした。

私は思わず彼に声をかけました。

「若き導命家よ、君の怒りは、まるで女に振られた後のようではないか」

「ええその通りですよ！私に構わないでください！」

「ならば往来の真ん中で叫ぶのはよしたまえ」

「私は真理を唱えた！」

「真理ではない。たんなる泣き言だ。その様な暇があるならば権力を手にいれよ」

そして私は、憤る青年に対して次のように語りかけました。

世間とは、風見人間による壮大な悲喜劇だ。みよ、あの誇らしげな英雄と、彼を讃える風見人間たちの演劇を。

嗚呼、風向きが変わって逆風となった。その途端に、拍手は拳となって英雄を打ち、賞賛は罵声となって彼の名誉を砕く。先ほどまでの威風堂々とした雄姿は一変し、今やみすぼらしい敗北者の影を引きずっている。おや、また風向きが変わった。拳は再び拍手となり、どす黒い罵声は黄金色の賛美となった。しかしそれも束の間、風は別の人物の為に吹き始めた。するとどうだ、風見人間の頭は新しい餌食の方に向けられ、かつての英雄は忘却の墓場へと送られた。そして世間では、相変わらず同じことを繰り返している。

無慈悲、無責任、無関心、気分屋、不定識、不定見、そして残酷、これが世間の本質。しかし、この性質であるがゆえに社会は変化を為し得る。なぜなら、社会の本体は常に民衆と世間によっ

て具現化されるからだ。本体が定型を持たぬからこそ、絶えず変化を続け、各時代の型を体現することが出来るのだ。

世間とはまさに雲の如し。形は定まらず、場所も不定、雨雲もあれば雷雲もある。

世間の形に従って自己評価する者は、雲の位置で自分の場所を定めるに等しい。

世間の評価に信用を置くな。

しかし、目を離してはならない。

知らぬ間に陰鬱な雨雲や凶暴な雷雲がお前の頭上を覆っているかもしれない。

若き導命家よ、お前はいつまで耐えることを美德としているのか。なぜ風下に甘んじているのか。颯爽と風上へ向かえ。己の風を吹かせるのだ。その為に刻苦勉励し、実力を身に付けよ。いつの日か、お前が風を起こすならば、これを覚えておくがよい。適度な風ならば心地よい幻覚を与える。しかし風が強すぎるとその幻覚を吹き飛ばして反感を引き起こす。

私がここまで語り終わると、青年は静かに、そして力強く頷き、風上へ向かって歩き始めたのです。

その姿を見送った私は、この街を後にしました。

善悪と利害

私たちホモサピエンスの世界で使用されている善悪は、「**判断者の利害**」を基準としています。判断する者に利益をもたらせばそれは善であり、損害をもたらす場合は悪となります。

利即善、害即悪。

利害の共有は善悪の共有。

そして善悪利害の形は時と共に移り変わります。

この観点から「約束事」について考えてみます。

例えば企業と企業の間で契約が取り交わされ、国と国の間で条約が締結されたとしましょう。この場合、契約・条約の履行と反故は、約款や条文の内容に基づいて施行されるものではありません。

取引企業・相手国の善悪利害によって決定されます。

判断者にとって、契約の履行が利であれば履行し、反故が利であれば反故にします。

そして、利は善ですから、判断者にとっては正しい行為なのです。

よって、契約の反故を悪だと批判しても効果はありません。彼にとっては、履行＝損なので、履行＝悪なのです。

相手の契約反故を防止するためにはどうすればよいか。

それは、「**物理的社会的経済的法的心理的暴力的軍事的報復手段**」を周到に準備し、契約反故による利益よりも報復による損害の方がはるかに大きく、さらに報復は必ず実行されると思わせることが必要です。そのうえで契約を結べば、大抵の場合、それは履行され、あなたの利益は守られます。

本項目の締め括りに次の言葉を書き記しましょう。

賢者は契約相手の倫理観や思考方法に基づいて相手の考えや行動を予測し、利益を得る。

愚者は自分の倫理観や常識に基づいて相手の考えや行動を予測し、全てを奪われる。

善意と悪意

海には様々な生き物がおり、マンボウやイルカのように愛嬌のある生物もいれば、ウミヘビやウツボ、そしてホオジロザメのように危険な生物も混在しています。

ダイビングを楽しむ際には、こうした避けるべき生物を見極めることも、重要な技術なのです。

これと同じく、人間の社会にも避けるべき性質の人々がいます。

例えば突然殴りかかってきたり敵意を剥き出しにする輩です。

そう言う連中は判別が容易く、そして誰しものが本能的に避けるでしょうから敢えて指摘する必要はありませんが、私がここで取り上げる人々は、ごく普通の小市民であり、それこそイルカやマンボウのように穏やかなので一見すれば無害のように思ってしまうますが、実は大変厄介な存在なのです。

その避けるべき、注意すべき人々、それは2種類います。

善悪の判断を社会や世間そしてメディアに委ねている人、そして善意を押し売りする人です。

前者の場合、彼らは、社会が暴力を悪と見做している場合、社会悪の名のもとに暴力を否定します。しかし、一旦社会が暴力を善と見做した場合、社会が許容する限りの暴力行為を、社会善の名のもとに行使するのです。

つまり彼らは確固たる識見を持たず、風見鶏のようにくるくると善悪が回転する非常に不安定な脳味噌を抱えているわけです。ゆえに、社会が変われば簡単に前言を撤回します、必要とあらば裏切ります、しかも、その裏切りを善とすら思っているのです、相変わらず善人面をして日々を過ごすのです。

その社会ですが、これはメディアによっていとも簡単に操作されます。

そのメディアは、無限ピースあるジグソーパズルを幾枚か大衆に見せ、その幾枚があたかも全体像であるかのように説明をします。星座のようだと思えばよいでしょう。断片的な情報のピースをそれらしく並べ、ピースとピースを線で繋ぎ、物語に合わせて絵を描き、着色します。そしてそれが真実であり、全てであると強弁します。もはや、事実に基づいて描かれたフィクションと呼んでも過言ではありません。下手をすれば、事実そのものを捏造して完全なる虚構世界を確立し、それを「事実」と喧伝することもあります。

ゆえにメディアを疑うことなく、彼らの物語を鵜呑みにする人々は、メディア以上に信用ならな

いのです。

さて、後者に挙げた「善意の押し売り～」について説明します。

人間というのは私に限らず、非常にひねくれた精神の持ち主が多く、日常の言動には必ず裏表が存在します。例えば、溢れんばかりの善意を持っている人でも、彼または彼女の善意が断られると、腹を立てます。例えば「俺の酒が飲めねえってのか！」のように「俺の善意が受け取れねえってのか！」と善意の欠片もない荒ぶる表情で迫ってきます。

当初からそのような表情ならばこちらも警戒できますが、善意の人はとても穏やかで優しい表情をゆらゆら揺らしながら近づいてくるためつい安心してしてしまうのです。

それで善意の押し売り状態を作ってしまいます。

そして思わず断ってしまえば「俺の善意が～」となります。

善意を押し売りするヒトは、善意を断られると敵意を抱きやすいという実に厄介な精神構造の持ち主です。彼には一言、感謝の言葉を述べればよいのです。善意を無碍に断ってはいけません。

ただし注意すべきは、善意の人が、善意に偽装した別の意図を隠し持っている場合です。

善意を断れない心理、これを利用しているわけです。

彼は善意を押し売ることであなたに恩を着せ、優位な立場を手に入れようとしています。

あなたが受け取らなければ、あるいは途中で突き返せば「この人でなし！」と非難するでしょうが、一切気にすることはありません。偽善を押し売りするような輩に、良いヒトだと思われる必要はないのですから。

むしろこのような連中に「あんたは良い人だ」と思われる方が、却ってあなたの名誉を損なうでしょう。

誰からも「いい人だ」と思われたい、と願うなら、その時点で充分嫌な人です。

とは言え、どうしても断り辛ければ、心の中で、偽善の包装紙を破り捨てればよいのです。

そうすれば露骨な「見返り」が姿を現すでしょう。それをじっと見つめていれば、断る勇気が湧いてきます。

すると相手はあなたの心の隙間を見失って狼狽えるでしょう。

善悪の判断を社会や世間そしてメディアに委ねている人、そして善意を押し売りする人。

このような者たちに心を許してはいけません。

常に警戒して接することが、「人間の海」を安全に泳ぐための技術と言えるでしょう。

歴史との付き合い方

国際政治の世界を見ておりますと、しきりに「歴史」を外交手段のカードに用いたり、自分たちの行為を正当化するための免罪符ないしは印籠のように使っている場面に出合います。特に「歴史認識」という言葉は使い勝手がよいのか、テレビで耳にしたり新聞で目にする機会は少なくありません。

そこで、その「認識」を詳しく分析してみますと、実は認識ではなくて単なる「解釈」、つまり「歴史認識を正しく持て、と主張している集団や組織の解釈」だったりします。「歴史認識」という言葉を発する集団は、自分たちの解釈を「正史」として認識しろ、というわけです。

あくまでも外交手段のカードとしての「歴史」ですから、使用方法は正しいと思います。しかしこれは政治次元での用法であって、個人の次元で行う場合は歓迎できません。

私たち一人一人が自分の頭で考え、歴史を語る際は、何が、いつ、何処で、何故起こり、その結果どうなったのか、そしてそれが現在にどう関係し、どのような未来へと繋がるのか。これらを心掛けることが肝要です。

この一連の作業に、善悪好悪優劣の感情や解釈が加わった場合、それは歴史ではなく一つの物語、あるいは特定の意味づけを目的とした政治的創作物と化してしまいます。

時間

(問) 時間の流れについてどのようにお考えでしょうか？

「時間とは風のようなものでして、過去から吹き付けもすれば、未来からも吹いてくるのです。そして、それがぶつかり合い、時間の渦を形成しているのです。台風を想像してもらえばいいでしょう。現在の我々が時間の風圧を感じない理由、それは時間の風の目に居るからです。風を感じたければ、現在から意識的に離れてみればよいです。すぐに吹き飛ばされますから」

(問) 人間の寿命は儚く、一瞬の明滅に過ぎないのでは、と年がら年中溜め息をついています。

「では、2千年前から今を眺め、2千年後から今を捉えてみてください。あなたは4千年の流れに立っていることを実感するでしょう。それと同時に、随分長生きしているような気もするでしょう。あなたの認識では、あなたは4千歳なのです。ゆえに地球を意識すれば48億歳、宇宙ならば百150億歳となります。あなたが死んでもそれは肉体の滅亡であり、年齢自体は地球、そして宇宙が存続する限り続くのです。

このように考えて過ごせば、儚い人生にも余裕が生まれるのではないのでしょうか」

希望

(問) 現代社会は仕事も殆どなく、人間関係も希薄で実に殺伐としています。このような社会に希望はあるのでしょうか。

「社会の中に希望が有るか無いか。正解は、『無い』です。なぜなら、**希望とは心の中にあるからです**。外部には存在しません。例えば戦国時代。現代よりも遥かに殺伐としていますし、君が戦国時代の農民ならば「夢も希望も無かりけり」と呟いて絶望するのではないのでしょうか。しかしながら豊臣秀吉、当時は藤吉郎、または日吉、と名乗っていた彼は、立身出世の道を、弱肉強食の戦国時代に見出したわけです。

では、秀吉は時代の中に希望を見たのでしょうか。見てないと思います。希望の光を見たとしても、それは、心の中の希望が投影された光なのです、心の投影図、とでも申しましょうか。その一方で、君は殺し合いを恐れて小屋の片隅で震え「こんな時代に夢も希望もないんじゃ」と弱弱しく泣いてるわけですが、本当は時代でも社会でもなく、君の「心」に希望が存在しないから、外部世界に希望が投影されず、殺伐とした風景だけが見えてしまうのです。

現代も同じです。社会に夢と希望は存在しません。ですから心の中に希望を持たない限り、外部世界は殺風景な時代でしかないのです。

(問) 希望を持つにはどうすればよいのでしょうか。

「自分と向き合うことです。特に、欲望とです。その為には、夢と希望を社会に求めないことです。外に求めている限り、自分と向き合おうとせず、外部に責任転嫁を繰り返して時間だけが無駄に過ぎてしまいます。そもそも社会と言うのは死屍累々たる戦場みたいなものですから、希望を求めても無駄なのです。しかし、生き残りたい、武勲を挙げたい、等の欲望があり、それを噛み締めれば、希望は自然に生まれてきます、そしてそれを外部に投影すれば、たとえ微かでも希望を見ることができます。日常もそれと同じです。希望が無い者は往々にして欲望も希薄なのでそこから再構築することが大切でしょう。導命家には八百万の道がありますので、希望も欲望も、大変充実した生涯を送ることができます」

人生と云う名の戦争

人間社会も、突き詰めれば野性社会であり、人間は野生動物です。
つまりは弱肉強食の恒久的戦国時代。

こうした社会を生きるためには、形振りを構ってはいられません。

世間の倫理道徳に照らし合わせながらも、自分に適した戦略と戦術を駆使して、人生の目的を達成するのです。

生きるとは戦争です。

利害を共有している人物と集団以外は須らく敵であると心得ましょう。

そして、利害が対立すれば親兄弟でも殺し合いにまで発展することを肝に銘じましょう。

地球の美

未来人の地球外共同体にも桜やツツジはあるだろう。それらは地球の季節に合わせて咲き、散るだろう。しかし、それはあくまでも人工的な環境によるものであって、地球の模倣にすぎない。海、森林、渓谷などのような大自然ともなれば、当然共同体には存在しない。

つまり「自然の有無」こそが、地球外共同体で暮らす人々と、地球で暮らす地球人の生活の決定的な違いである。

地球人は地球の自然に囲まれて生活し、その中で美意識が育まれた。そして地球人の美意識を芸術という形式によって表現した。

この美意識と芸術は、地球人だからこそ得られた地球の美を現している。いわば、**地球美の宝庫**である。

地球外で生まれ育った新種人は、地球そのものを一つの芸術作品と考える。

また、例えば友禅やオペラは、日本人、欧州人という「地球人」の生み出した「地球の芸術」、そして日本の美、欧州の美を「地球の美」と呼ぶ。

失われてしまった芸術作品や技術を惜しいと思ったことはあるだろう。地球外に住む我々の子孫に同じ思いをさせてはならない。

21世紀の地球人が、自分たちの都合によって、自然環境、伝統技術、美意識を破壊し、捨て去ってしまうことは許されない。

導命家は、地球外共同体で生活する新種人に向けて、地球の美を伝えなければならない。

21世紀や22世紀の地球人だけを相手にするのではなく、遠い将来、地球外共同体で生活する地球を知らない未来人も朋友と見做す、そういった視点と認識を持つことだ。

世界遺産は地球人だけのものではない。

人生と云う名の芸術

人生とは一つの芸術であり、生涯とは一つの作品である。

そしてこの作品は、死を以て完成する。

才能ある人物にとって、人生とは芸術なのだ。

実業家にとっての経営、政治家にとっての政治、軍人にとっての戦争、思想家にとっての思想、社会活動家にとっての社会運動。

これらすべて、芸術である。

美について

導命とは私にとっての思想美であり、それに基づいて作られた世界は美の対象となる。美と一体化しているとき、私の本体である御魂は最も輝く。己にとって基も美しいと思える存在と一体化することは最大の幸福である。外形の美、内面の美、平凡の美、生活様式の美などそれぞれであり、美の追求が人生の多様性を生み、育むのである。その人にだけ理解、賞味できる。周囲の批判や批評は、畢竟雑音である。ゆえにそれは意味を持たない。もし雑音に意味を見出すならば、それは幻聴である。

＊

全体性を考慮しない、あるいは全体の美や統一美という概念が存在しない集団は、様式美の追求が全てであり、雑多で統一性がなく、美的に無秩序な世界を作り上げ、それを当たり前と考える。

＊

統一美の乱れた文化、あるいは喪失した文化は徐々に衰退する。このようなところからは、包括的な創造性や美は育たない。

＊

最も優れた統一美は宇宙である。

＊

文化は様々な美によって体現されており、その中心は生活美である。これを扇子に例えるならば、生活美は要の部分に相当する。要を失った扇子が体を為さぬように、生活美を喪失した文化は自身の美を保てない。

＊

霊性は、細胞からじわりと生じ、体内を満たす。

霊性に浸っていると考えてよい。

しかし、ただ漫然と現実を過ごしていれば、

霊性は枯渇し、物理的実体として存在するだけになる。

霊性の渇きを感じたなら、芸術の陶醉に身を任せよ。

芸術とは、霊性の源泉なのである。

＊

芸術作品を創出し、これを賞味する感受性は、衣食住遊を中心とした日常生活から生じる。そして芸術は、創作する側と、鑑賞する側の総和によって成立する。よって観客の知性や感性も芸術作品を構成する諸要素の一部となる。芸術家にとって、生活習慣、社会行事、政治、経済への働きかけも、創作活動の一環なのである。

＊

古代より伝わる精神、美意識、霊性。これらが伝統芸術の本質である。各時代を特徴づける様式を作り出す者たちは、本質を過去から受け継ぎ、未来へと導く役割を担っている。真の伝統とは、型の継承ではなく、芸術家を本質の系譜に向かわせるところの精神にある。

*

千億人がそれを美として讃えようと、
お前に響かねばお前にとっての美に到らず。
千億人がそれを醜として避けようと、
お前に響けばお前にとっての美に到る。
千億人の唱える美醜は千億人のそれ。
お前の唱える美醜はお前のそれ。
私の唱える美醜は私のそれ。

魂と魂の交感

一般的に行われる肉体次元での性行為は当然心地よいものですが、御魂が自分の本体であると自覚している者にとって、肉体は衣服のようなものだから、完全に満足するほどではありません。例えば、服を着たまま抱き合っても、肉体ほどの満足は得られないように。やはり、あなたの本体と相手の本体が交わる、魂次元での交感こそが、理想的な姿と言えます。

ただしこの場合、ただ交わるのではありません。

御魂人は、それぞれが霊的エネルギーを持っています。

交感時には、互いのエネルギーが交じり合うことを意識し、最終的にはエネルギーの統合に至ることが大切なのです。

しかしながら、今生では魂と魂の交感の機会を得ることが非常に難しい。

なぜなら、自分の本体は御魂人である、と自覚する者は少なく、ゆえに魂と魂が共鳴・共感するような出会いが稀だからです。

今生における殆どの出会いは、肉体次元での交わりに終始してしまう。

もしあなたが、魂と魂の共鳴し合う人と出会えたならば、それはじつに幸せなことです。

その出会いを大切にしてください。

恋愛

《1 恋愛と幻想》

認識対象と認識像は全く別物である。恋愛もこれと同様である。恋愛対象は実在の人物でも、あなたが愛しているのは対象の人物そのものではなく、あなたによって作り出された認識像なのである。そしてこの像は、過剰に装飾され、都合の悪い部分は修正されがちである。つまり都合よく作られた場合が大半である。恋愛とは、この幻想を愛する事から始まる。

恋愛とは実に甘美であり、無敵の存在の様に思えるが、天敵は存在する。

それは、「現実」という巨大なハンマーである。

都合のいい恋愛像に打撃を加える、あるいは打ち砕くことが、その使命である。

大恋愛であろうと、おぼろげな愛であろうと、現実のハンマーは己の使命を全うする。

これによって次の言葉が導き出される。

「恋愛の成長とは、破損した幻想を懸命に修復し、今まで以上にそれを愛することである」

この繰り返しが、恋愛を成長させるのである。

《2 積極的な心理状態の中核には自尊心がある》

自尊心は様々な精神活動を送る際の心臓の役割を果たす。気力、精力を血液のように送り込んでいる。ゆえに自尊心を喪った者は、廃人と化すか、別個の人格つまり別人となって過去を抹殺し新たな自尊心の型を満たすか、それとも自殺するかであろう。いずれにしても、現状維持はありえない。誰も耐えられないのだ。戦後の日本は戦前の自尊心を粉碎されたため、平和国家という新たな人格を獲得した。そして経済大国という自尊心の型を満たすことで命脈を保ってきた、その代わり、過去が犠牲となった。

《3 恋愛感情とは願望の反映》

恋愛感情は、炭素のようにそれ自体として存在しているのではなく、社会的名声、利害関係、美意識や肉体的な満足感などの諸要素が複雑に組み合わさって成立している。誰かを無条件で好きになるとは考えられない、人によってはただ彼や彼女のことが好きだということかもしれないが、本人が自覚していないだけで、大抵は明確な理由があるものだ。

《4 鑄造と恋愛》

女の恋愛とは一種の鑄造（ちゅうぞう）である。

最初に容姿、学歴、社会的地位、性的快楽、虚栄心、精神的愉悦といった材料を溶かして自己愛を作る。

次に、自尊心の鑄型（いがた）に自己愛を流し込み、理想的な自己像の鑄物（いもの）を取り出す。

最後に、自己像の鋳物を恋愛相手に埋め込んで生身の自己愛像を制作し、それをひたすら慰撫する。

つまり女の恋愛とは、誰かを愛するという行為を通して自分を愛し、その自己愛によって自尊心を満たすことである。そして女にとっての恋人とは、自己愛の等身大の投影像である。

男の恋愛とは単純に生身の女を求めることであり、男にとっての恋人とは生身の女のことである。

恋愛と結婚

「男女の愛、愛の言葉」

男にとって愛は人生の一部。

女にとって人生とは愛の一部。

男は女を抱きたいがために愛の言葉を囁き、

女は自分を愛したいがために男の言葉を受け入れる。

恋愛関係の基礎に求めるもの。男性は肉体的な繋がり、女性は精神的な繋がり。したがって恋愛観や恋愛の価値体系も異なり、価値体系が異なれば恋愛を構成する諸要素の価値や解釈にも違いが生じる。この認識は大変重要である。男と女、恋愛に関しては殆ど別種の生き物と考えてよい。

しかしながら現実には酷薄だ。男女共に、相手の考えも自分と同じだろうと思いついたため、日常の出来事などで解釈のずれ違いや致命的な衝突が生まれてしまうのだ。男にとって些細なことが女性にとっての一大事であったり、女性にとっての何気ない一言が、男の沽券に関わる禁句だったりする。

こうした不幸を防ぐには恋愛観についての正しい理解が必要だが、仮に男女の違いを理解しても感情的に許せないため、結局は死闘を演じることになる。

戦いは避けられず、平和は遠い。

しかし、充実感はある。

「幻想と現実」

恋愛は甘美な幻想であるが、結婚は露骨なまでに現実である。恋愛中は「夢なら覚めないでくれ」と二人で願い、結婚後は「夢だと言ってくれ」と独り呟く。

「安全保障」

国家に関する安全保障は、精強な軍隊を持ち、内政を充実させることで達成できる。

企業に関する安全保障は、買収対策を施し、優秀な人材を育成することで達成できる。

結婚に関する安全保障は、結婚しないことによって達成できる。

「虚像と実像」

結婚した途端、親になった途端、以前とは別人になってしまった！との叫び声は古今東西途絶えることはない。これは当然であろう。なぜなら人間とは、立場、関係性、利害によって如何様にも変化するからだ。恋人として、婚約者として、夫婦として、父母としての男女はすべて別人である。その時々々の姿ではなく、本質を見抜くように心がけよ。意識的に取り繕った振る舞いは虚

像であり、何気ない言動にはその人の実像が色濃く表れる。

「烈々たる覚悟」

今交際しているこの人は、婚約中のこの人は、いったいどの様な妻、夫、母、父になるのだろうか。人間どう変わるかわからない、まさに一寸先は闇である。ゆえに、恒星の如く燃え上がる結婚への覚悟のみが、この闇を遍く照らすのだ！

そう思って一緒になったが、闇は一寸どころか宇宙規模で広がり、自慢の恒星的覚悟もいつしか線香花火の如く小さな丸玉となって、今は人生の片隅を静かに照らすのみ。

「人間愛」

結婚前に気になっていた相手の欠点も、愛情があれば個性として受け入れられると考えていたが、愛情は永遠でないため、愛くるしかった個性は暑苦しい欠点となり、やがては夫婦生活の課題となる。

覚悟があれば欠点を受け止められると思ったが、その覚悟も長くは続かず、欠点は欠点として夫婦生活に重くのしかかる。

結局は、愛情や覚悟といった華美な包装紙を取り払い、欠点を欠点として素直に受け止めるしかないのだ。

配偶者に対するよりも、人間そのものに対する大らかな愛情が、幸福な結婚には求められるのだろう。

「続けること」

何事も、始めるより続けることの方が困難だ。例えばダイエットでは、痩せることよりも、痩せた状態を維持する方が難しい。

恋愛と結婚も同様で、交際を始めることよりも交際を続ける方が難しく、結婚することよりも夫婦生活を維持する方が難しい。

「家庭という戦場、配偶者という不倶戴天の敵」

ある男性は語った。

「若者たちよ、俺を反面教師として学んでくれ。同じ轍を踏んではいけないよ。志を遂げなければ、志を理解し合える伴侶を持つか、あるいは全く結婚をしないことだ。最も良いのは、志を理解し合える者と一緒になること、次に良いことは、結婚をしないこと。そして絶対にしてはならないこと、それは、志を理解しない者との結婚である。嗚呼！俺は愚か者だった！『志を理解せぬ者との結婚』という戦争を始めてしまったばかりに、家庭は凄惨な戦場となり、妻は不倶戴

天の敵となった。そして、俺は、敗北した。

若者よ！未来と飲み交わす者よ！お前が志を遂げるために生まれて来たのであれば、役割を果たすために肉体を纏い、名を授かったのであれば、志や役割を理解しない者と結婚してはならない」

「似た者同士」

同じ水準の者が一緒になる。自堕落な人物と交際していることは、自分も自堕落であることを意味する。

「崇高な生命体」

良き夫婦と良き家庭とはそれ自体が崇高な生命体である。

「切磋琢磨」

人生観や価値観が明確でないと結婚相手に求める条件も曖昧になる。

条件を定めることは大切だが、一方通行ではいけない。

理想の条件を求めるばかりではなく、相手に求められている条件を提供できるかどうかが重要となる。

お互いの条件を理解し、その水準へ近づけるよう切磋琢磨していく過程で、夫婦関係を維持するために必要な信頼関係や愛情が醸成される。

「結婚生活の織布」

結婚生活は、一枚の織布である。それは、夫婦や家族で織り上げた日常生活という生地、愛情や世間体という縫い糸、前向きな心という縫い針によって形作られる。

将来像の型紙に沿って一日分だけ生地を織り上げ、その日の色彩に染め上げる。人間関係や出来事等の紋様を生地に描き、色を挿す。出来上がった今日の生地を、縫い糸と縫い針を用いて昨日の生地と縫い繋げる。この作業を一日、一日と積み重ね、いつしか一反の反物あるいは一枚の着物が生まれる。

出来上がった布には一日として同じ物はなく、また、明日も生地を織れるとは限らない。ゆえに日々を大切にし、感謝しながら生きていくこと。

仲睦まじく、日々の生地を織り続けられることは、実に幸せである。

人工子宮と未来の話

未来社会は人工子宮や代替子宮が実用化されている。これによって男性は卵子バンクから卵子を購入し、体外受精による受精卵を人工子宮に着床させるだけで、自分の子供を持つことが可能になる。

また、男性と女性の肉体に限りなく近い性行用のロボットが開発される。十分な性的快楽を得られると同時に、感染症のリスクもほぼ無くなるであろう。

妻や母親の不在という点を問題視しない男性たちは、もはや女性を必要としない。

人工子宮の利点は何か。それは母体の影響を胎児が受けないという点だ。例えば母子感染はなくなる。妊娠中のリスク、あるいは母親の死亡と同時に胎児も亡くなるという悲劇も消える。デメリットは、人工子宮の故障や、設備の不調等による胎児の死亡等である。

妊娠と出産のリスクを避けられるという点で、これを支持する夫婦やキャリア志向の独身女性は少なくないであろう。

さらには、体細胞からも生殖細胞が作られるので、男同士、女同士でも受精は可能であり、人工子宮を使用すれば子供を授かることができる。

従って、生殖に限って言えば、男女の性差はほとんど意味を持たなくなる。

それに伴って、地球人は人工子宮を積極的に使用する集団と従来の生殖方法で子孫を残す集団に別れる。前者の集団内では日常社会でも男性と女性の果たす役割が現在とは大きく異なっている。

後者の集団内では現在と似たような役割が継続されている。

同じ星に住んでいながら互いを異星人のように感じ、各都市で棲み分けが行われる。

人間絶対主義者と環境主義者

ある日の午後、私が公園のベンチに座っていると、一人の男が目の中の広場に現れた。

「私は人間絶対主義者であり、地球の支配者である。人間は宇宙で最も尊い存在であると同時に、宇宙で最も優れた生命体である。人間は進化の完成を遂げているので、進化をする必要はないのだ。人間絶対主義者の私はヒトゲノムより優れたゲノムを認めない。全てのヒト種は未来永劫ヒト種のみでなければならない。ヒト種を超えた種を生み出してはならない。人間は宇宙の中心であるから、人間にとって素晴らしい物が素晴らしく、人間が善であると考えられる物が宇宙においても善であり、人間が悪と考える物が宇宙においても悪である。おお、人間を敬え、人間こそが宇宙の支配者であり、宇宙の善悪を司る偉大な存在なのである」

そこまで言い終えると、別の男が現れて同じように叫んだ。

「私は環境主義者である。地球を守ることが私の使命である」
人間絶対主義者と環境主義者は睨み合った。

そこへ焦げ茶色のカラスのような鳥が飛来し、男たちの頭上で羽ばたいた。

「私の名は怨嗟(えんさ)。種族を根絶やしにされた鳥獣の怨念である。人間絶対主義者よ、環境主義者よ、心して聞かざるがよい。貴様ら人間は、全生物を巻き込みながら阿鼻叫喚の地獄絵図を繰り広げる狂信の暴走集団でしかない。地球系生命体の観点から眺めるならば、『致命傷を与えかねない強毒素を有した悪性組織』である。破壊的な毒素を有した細胞や組織が、お前たちの体内で縦横無尽に暴れまわっている姿を想像してみろ。さらにお前らは、現在および将来にわたって、自分たちのニーズを満たすために持続的な開発を行おうとしている。この期に及んでもなお、人間の継続的な利益が価値体系の中心なのだ。人間とは地球や他の生物にとってどのような存在なのかよくわかるだろう。地球の為を思うのであれば、さっさと滅亡しろ。全生物の願いだ。私も他の生物を捕食して生きてきた。どの生物もそうだ。それは、生存のためだ。お前たちが同様の理由で我々を捕食するのであれば、我々は受け入れた。それが生命の掟だからだ。しかし、人間よ、お前たちの理由は違った。遊びだ。快楽だ。娯楽だ。自分の種族を、そうした理由の為に根絶やしにされてみる。そうすれば我々の痛みがわかる。お前たち人間が、高等種族の楽しみのために狩り尽されたらどのような気持ちになるか。いや、これ以上言うまい。お前たちには想像力が欠落しているからだ」

「無礼者！」

人間絶対主義者は怨嗟に向かってショットガンを放つと公園を後にした。

一人残った環境主義者は怨嗟にこう言った。

「環境主義者としてお前の侮辱は受け入れがたい。私は地球に敬意を払い、その環境を守っている」

怨嗟は彼に問うた。

「環境主義者よ、お前の関心事は何か」

「それは異常気象だ。明らかに人間の振る舞いが原因である」

「異常気象と言われている現象の異常性は、あくまでも人間にとっての異常であり、人間がそのように考えているだけだ。つまり、人間の持続的で豊かな生活が脅威にさらされていることに反応しているのだ。環境、環境と言いながらも、その中心には人間という特定種の利益が居座り、その周囲を、人間の生活に恩恵をもたらす資源だけを並べて装飾している。森林の減少や自分たちが飲料に使用する水資源の汚染は議題に取り上げているが、微生物の変動には誰も興味を持たない、彼らもまた、立派な環境の一部なのである。環境を守れ、地球を守れ、と叫ぶが狂気の沙汰も甚だしい。人間にとって異常な気象が、惑星にとっても有害であると本気で考えるとは。そもそも惑星が滅ぶとは具体的に何を指しているのか？温暖化が進み、全ての陸地が水没すれば自転や公転が止まるのか？木っ端みじんに地球が砕け散るのか？俺を笑い死にさせるつもりだな。

人間の正義とやらは、国際利権を土壌とし、次にマスコミ、スローガン、世論などに煽られ感情的に狂信的に騒ぎ立てる民衆を肥料として、見事な花を咲かせるのだ。その花は、新たな利権構造という蜜を権力者にもたらし、彼らを恍惚の花園へ誘うのだ。

そしてお前は地球を守れと言う。何から守るのか。人間だ。人間から守るのだ。ならば最善の環境保護は、人間を一人残らず殺すことだ、害虫を一匹ずつ駆除するように。例えば、こんな感じだ」

人間絶対主義者の放ったショットガンの弾が怨嗟の身体から飛び出して環境主義者の足元を撃った。環境主義者は血相を変えて公園から逃げ出した。

怨嗟は高笑いを響かせ、天高く飛び去った。

導命駅伝

ある日私は、幾数多の惑星系生命体が参加している駅伝大会に参加した。これは、其々のDNAをたすきとして、種から種へと繋げていく競技である。

DNA駅伝と言うだけあり、競技者の姿形も多様性に富む、実に魅力的な大会であった。

当然、地球系生命体もこれに参加した。

私を含めた地球人たちと、他には類人猿、牛、馬、タンポポ、マンボウ、微生物などの動植物が代表として選ばれたのである。

まずは微生物からスタートし、続いて海中植物、深海魚へとDNAのたすきは伝わっていった。その後は絶滅の危機を迎えながらも、たすきはピテカントロプス〜クロマニヨンへと繋がり、そして、我ら従来型ヒト種の手にわたった。

さあ、次は我らが未来の種につなげる番である。新しい種を生み出し、DNAのたすきを未来へ届けるのだ。

他の惑星では常識となっている進化を遂げ、地球系生命体を成長させるのである。

進化せよ、進化せよ、これが常識なのだ！

と私は思っているのだが、現実とは異なる方向へ進んだ。

各国の参加者は思い思いの行動をとったのである。

米国人は、駅伝大会の金融商品化を画策していたが、隣の惑星の某人も同じように金融商品化を考えていたため、その権利を巡る大規模な訴訟合戦を始めた。

英国人は、訴訟のルールを作り、米国人と某人の双方に投資をし、紅茶を飲みながら、婉曲な言いまわしで皮肉を呟いていた。

ドイツ人は、大会の規則を完全に覚えようとしていたら、スタート時間を越えてしまい失格となった。彼は理屈っぽいクレームを付けたが規則だと言われ納得した。

フランス人は、一応スタートしたが、途中で選手の待遇改善を要求するデモ行進を始めた。要求は却下された。

イタリア人は、隣の惑星の美女を熱心に口説いていたが、彼女の父親に殴られて負傷し、戦線離脱した。

スペイン人は、隣の惑星の牛にちょっかいを出していたら追いかけられ、そのままコースを疾走したが、タスキを持っていなかったので失格となった。

インド人は、日陰でチャイを飲みながら複雑な暗算をし、猛牛に追いかけられるスペイン人をじっと見ていた。

日本人は、タスキの軽量化と小型化を繰り返し、タスキは最終的に電子顕微鏡で確認しなければならなくなった。彼は電子顕微鏡を抱えて走ったが、休憩中に電子顕微鏡の軽量化に夢中となり失格になった。

中国人は、参加人数の多さに商機を見出し、中華料理の屋台を始めた。遂には大酒店を構えるまでに繁盛した。彼は別の惑星に移民した。

ロシア人は始めから酔い潰れていた。

私はこれらの光景を目にして、呆気にとられていた。

ああ、地球の宇宙開発を担う国々は、たすきを繋げるという役割を認識していない。他に誰かいないのか！

そこへ登場したのが、人間絶対主義者だった。

彼は自己紹介を行った。

「私は人間である。地球の支配者である。人間は宇宙で最も尊い存在であると同時に、宇宙で最も優れた生命体である。人間は進化の完成を遂げているので、進化をする必要はないのだ。人間絶対主義者の私はヒトゲノムより優れたゲノムを認めない。全てのヒト種は未来永劫ヒト種のままでなければならない。ヒト種を超えた種を生み出してはならない。人間は宇宙の中心であるから、人間にとって素晴らしい物が素晴らしく、人間が善であると考える物が宇宙においても善であり、人間が悪と考える物が宇宙においても悪である。おお、人間を敬え、人間こそが宇宙の支配者であり、宇宙の善悪を司る偉大な存在なのである。さあご来場の皆様もご唱和ください！人間万歳！最高人間！ビヴァ人間！」

他の惑星の参加者や大会幹部から哄笑が沸き起こった。

恍惚とした表情でなおも自画自賛を続ける人間のもとに、ネアンデルタール人とピテカントロプスが現れた。

「私の名はネアン。ネアンデルタール人絶対主義者である。みよ、この研ぎ澄まされた最新型の石斧を」

「私はピテカン。ピテカントロプス絶対主義者である。私こそが宇宙の中心、完成された生命体である。最新型の棍棒がそれを物語っている」

人間絶対主義者は怒り狂った。そこで彼は、最新型のデジタルカメラを取り出して、二人の写真や動画を撮影した。「さあ敬え、宇宙に轟く人間の科学力を！ここに写っているのはお前たちだ！」

「おお！私を返せ！」

「私を解放しろ！」

ピテカンは棍棒を振るってカメラを地面に叩き落とし、ネアンは荒ぶる石斧で人間の科学力を粉砕した。

「何てことをしでかすのか、この原始人め！」

「解放した私と解放された私の同一性とは何か」

「私とは分離するのであるのか、そもそも私とは何であろうか」

ネアンとピテカンは議論を始めた。

そこに責任者が登場した。

「いい加減、真面目にやってくれたまえ。どうしてこんなに簡単なことが出来ないのだ。さあ、現在の走者であるヒト種よ、ホモサピエンスよ、このタスキをかけて走りたまえ」と言ってピテカントロプスにたすきを渡した。

ピテカンは激昂した。

「地球系生命体にとって悪性ウイルスの如きヒト種と、誇り高きピテカンを間違うとは！」

怒れるピテカンの隣では、人間絶対主義者が憤慨していた。

「棍棒を得意げに振り回しているだけの原始人と、進化の完成を果たした人間を一緒にするな！」

担当者は両者の怒りが理解できなかった。

「いいかね、我らのように高度な進化を遂げた生命体にとって、ホモサピエンスもピテカントロプスも大して違いはない。どちらも原始人だからな」

このセリフにたまりかねたのか、ネアンデルタール人が苛立たしげに反応した。

「やいやいてめえら、さっきからこのネアン様を無視するたあ一体どういった了見でい。ええい、そのタスキをよこせ！おいらが走る！」

「おいこらそこの原始人、何処へ行くのだ！タスキを返したまえ！」

担当者はネアンを追いかけ、人間絶対主義者は彼らを追走しながら最新型のスマートフォンで動画撮影していたところを同じく追走してきたピテカンに棍棒で殴りつけられていた。

この混乱に、大会運営者を始めとした全参加者はあきれ返った。

そして大会幹部たちは緊急会議を開いた。

曰く、地球系DNAの設計者に責任を問うべきではないか。もはや救いようがないのでいっそのこと宇宙から地球系生命体を消去してはどうか。少なからずの生命体では、ヒト型に到り、惑星外へ進出する頃には、自我肥大により万能感や全能感に支配されがちである。地球もその過程であろうから、ある程度は大目に見るべきだが、若干、目に余るところもある、と。

会場は大会どころではない。軽蔑と哄笑の入り混じる雑然とした雰囲気になった。
私は我慢がならず、大会運営者の前に歩み出て次のように語った。

「私たち地球系生命体は、最近ようやく惑星外に到達した若い生命です。いわば、萌芽の状態なのです。自らを進化の完成、生物としての完全体と考え、自分の種であるヒトを絶賛し、尊い存在であると公言して憚らないのは、幼さゆえの無知から生じたもの。しかし、私たち導命家は、宇宙を貫く生命の流れを知っています。ヒト種の次の走者は、新しい種であると理解しています。従来型ヒト種の役割は次の種を生み出すことだと知っています。進化とは地球系生命の成長であることも知っています。私は約束します。必ず、二重らせんのタスキを受け取る、新しい種を生み出すことを！」

大きな拍手が沸き起こった。

大会委員長は私にこう言った。

「設計者の問責や、生命体の消去は見送ろう。なぜなら、まだ地球には光明が残っているからだ。導命家よ、お前の意志は理解した。役割を果たすために生きよ。そしてお前に忠告しておく、人間絶対主義者は、やがて地球系生命体を死に至らしめる癌となろう。お前たち健康な細胞や組織はこれを打ち倒し、お前たちの属する生命体を、我々の段階にまで高めよ」

自分たちの幼さ、未熟さを実感した私たち地球系生命体は、競技を中断して帰星の途に就いた。

駅伝に参加するのは、もっと進化してからでも遅くはない。

その時は、周囲の惑星系生命体を唸らせるほどの実力を備えているだろうから。

新種人の言葉

- ・ DNAはお前が認識していた形状や性質とは異なる。お前たちの大脳皮質では認識できないのだ。知りたければ進化しなさい。
- ・ 我々と新旧ヒト種の決定的な違いは、脳の構造と脳波の使い方である。
- ・ 旧人の導命家は、我々の土壌、礎石、柱である。
- ・ 旧人、かつて人間と自称し、地球を我が物顔で支配していた幼い大脳の所有者。
- ・ 旧人の定めた導命、新人の定めた導命、そして我々新種人の定めた導命。生物が進化するように、思想も姿形を変える。しかし、基本は不変である。我々も新人も旧人も犬も猫もカブトムシも、DNAの被造物であり、総命の一部である。
- ・ 我らの導命とヒト種の導命についての違いを説明しよう。お前たちの導命が円ならば、我らの導命は円柱である。異なる次元が加わり成立した概念。その次元しか知らぬ者には理解できない。そして、我らの円柱もまた、高次元の概念を構成する諸次元の一つである。
- ・ 宇宙も魂も、お前の脳が認識している姿ではない。例えるなら、お前が見ている物は骨である。そして私が見ている物は肉である。骨格だけを見て生物の全形と考えてはならない。当然、私が見ている形状も、全体像ではない。
- ・ 進化とは成長すること、これは常識である。お前たちの未来即ち私にとっての現在では、脳の進化は神の存在をより詳しく知るための手段と捉え、進化を「神に近づくこと」と考える者もいる。そうした者たちが集まった宗教も存在する。

御魂人としての自我

- ・自我は様々な次元に存在する。御魂人としての自我、上位次元生命体としての自我、人間としての自我などだ。この自我を広げていけば、根源生命を認識することが出来る。
- ・しかしながら、まずは地球系生命体として懸命に生き、役割を果たし、御魂人に戻ってから、上位次元の自我に思い至れ。日常の積み重ねが大切なように、自我もまた、一つ一つの段階を確実に歩み進めることが大切だ。
- ・郷に入っては郷に従え、との言葉があるように、今生で肉体を纏ったならば今生の規律や物語に従え。
- ・物質界と魂界は次元が異なるため、四次元時空での自我という概念を当て嵌めても正確ではない。魂界には向こうの自我がある。自我の概念や姿が異なる。その自我の姿や形がどのようなものか、私にはわからない。
- ・肉体を纏っていた時の自己像と、肉体を脱いだ後の自己像は異なる。さらに言い進めるならば、肉体をまとう以前のお前と、肉体を纏っている時のお前と、肉体を脱いだ後のお前は、其々の自己像が異なる。
- ・魂命活動の部分的存在が今生の生命体。
- ・魂命は上位生命体の部分的な現れ。
- ・例えば甲という人物は、Aという魂命の部分的な現れ。
- ・Aの一部である「甲」は、意識によって認識されている「甲」のまま、Aへ戻るのではない。
- ・甲が死の門をくぐると、甲としての自我はAに刻印される。
- ・甲の人生、DNA情報は地球系DNAに記録される。
- ・「私」とは、意識によって認識された概念。意識とは魂識の一部が脳機能を通じて現れたもの。
- ・意識の深度は脳機能に依るため、脳が進化すれば意識も進化する。意識が脳の進化を渴望すれば、DNAを通じて脳は進化する。

- ・ 進化を渴望し、今生を全力で生きた者は、新たな肉体を纏える。
- ・ 新たな肉体を纏えば、より進化した意識を手にいれられる。
- ・ 新たな刻印がAに増える。
- ・ Aは根源生命を目指す。

導命家の系譜はこれから100年後、1000年後、1万年後、さらには100万年後も続くわけですが、その源流は日本の導命家であり、その聖地は日本にあります。日本の導命家は他の日本人と異なる視点、すなわち導命的観点から日本を眺め、把握し、理解しなければなりません。

とは言っても、導命的観点から眺めることが難しい人もいるでしょう。本項目では参考のための一助にってもらうため、導命的観点から眺めた日本を紹介したいと思います。

《日本という生命体》

日本もまた生命体である。と多元生命体の項で書きましたが、ここでは詳しく述べたいと思います。

日本は縄文時代から現在に至るまで、様々な統治機構、すなわち生体機構を辿ってきました。その中でも特筆すべきは明治維新です。

明治維新とは、幕藩体制から立憲君主国家という統治機構の変化であると同時に、生体機構の変化でもありました。そして志士とは、幕藩体制という生体機構を否定し、日本が生き延びるための新たな機構を求めた人々でした。

具体的な生体機構図を描いていた著名な人物は、脳的ヒトの坂本竜馬と大久保利通です。坂本は維新を迎える前に倒れましたが、内務卿として辣腕を振るった大久保は、武士という伝統的な型を壊して、軍人という新たな型への変化を要求しました。

当然のように、それは士族の激しい抵抗を生みました。佐賀の乱、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱、そして最大の抵抗を示したのが、西南戦争でした。

日本最強の武士集団である薩摩兵を率いた西郷隆盛は、軍議にほとんど口を出さず、側近や幹部たちの決定を黙って受け入れ、振り回されるように戦地を転々とし、最期は鹿児島市の城山で自決しました。おそらく西郷は理解していたのでしょう、新しい日本に生まれ変わるためには、武士という細胞の型が滅び、軍人と云う新たな細胞の型が武士の役割を担わなければならないことを。その為には武士が、特に薩摩武士が滅びねばならない、彼らが亡ぶには破滅的な、殆ど自殺に近い無謀な戦が必要だった。それが西南戦争であり、西郷は彼らに武士としての死に場所を与えるがため、自分の巨体を明治政府にぶつけたのでしょう。いわば西南戦争とは、日本が新たな生体機構に生まれ変わるためのアポトーシスだったのです。

勝海舟は西南戦争で散った西郷を想い、次のように詠んでおります。

ぬれぎぬを 干そうともせず子供らが
なすがまにまに 果てし君かな

西郷隆盛は無私の巨人でした。だからこそ、日本が進化する過程を自然に受け入れたのでしょう。西南戦争の結果、軍事力の中央集権化はほぼ完成し、この後は板垣退助を中心として自由民権運動が勃興します。そして明治憲法の制定に到り名実ともに立憲君主国家として生まれ変わったのです。

日本が新たな生命体へと進化する時に、西郷隆盛という無私の巨人が現れてアポトーシスの役割を一身に引き受け、大久保利通という極めて脳的な人物が新しい生体機構の中核を担ったのです。そして西郷は西南戦争で散り、大久保は旧石川藩士によって暗殺されました。二人はそれぞれの役割において唯一無二の存在であり、また同時に、無二の親友でもあったのです。

彼らの存在は、日本史における必然と言えるでしょう。

その後の日本は、日清・日露戦争、第一次世界大戦を経験しました。戦勝続きの勢いに乗り、第二次世界大戦に突入しましたが、連合軍の前に膝を屈しました。敗戦後は、GHQによって「軍国主義」が取り除かれ、「平和主義」を根幹とした日本国という名の共同体に生まれ変わりました。そして1945年8月の敗戦から2013年2月現在に至るまでは一貫して平和国家の道を歩み続けています。

しかしながら、日本を取り巻く国際政治の変化により、いずれは新しい環境に適応した生体機構を獲得し、「新生日本」として生まれ変わるでしょう。

それもまた、日本という生命体の進化なのです。

《長期的視野を持つには》

2011年3月11日の東日本大震災によって、日本は深刻な課題に直面しました。目下の課題は被災地の復興、放射性物質による高濃度汚染地域から日本という生命体を回復させることです。その為にも遺伝子工学、がん対策、放射線対策、ロボット開発に全力を注がねばなりません。東海地震や首都直下型地震などの固有地震と大津波による定期的な破壊を避けるため、いずれは地球外共同体への集団移住も真剣に考えなければならないでしょう。

これらの課題ですが、21世紀初頭の技術力を基準にすれば大変困難に思えます。しかし今世紀は力不足でも、22世紀、23世紀頃には、十分な力が備わっているかもしれない。ゆえに、長期的な視野が求められるのです。

日本人の導命家は、300年、500年、あるいは1000年、2000年の視野で全体を眺め、命が続く限り忍耐強く取り組まねばなりません。

あなたは、いま挙げた時間を長いと感じるかもしれませんが、それは当然だと思います。結末の見えない作業に従事していれば、意義や価値の輪郭線がぼやけてしまうでしょう。

その場合は、未来から今の自分を見つめましょう。例えば現代人が幕末や戦国時代を眺めるように、150年後または400年後から今の世界、日本、そしてあなたの振る舞いや生き方を眺めればよいのです。今を懸命に生きるあなたの姿が見えるはずです。そしてその姿は、21世紀を舞台とした、あなたという登場人物の物語でもあるのです。その様に考えてみて下さい。500年程度なら身近に感じられると思います。

《かなめ論》

扇子には、要があります。

ほとんど目立ちませんが、この要が無ければ、扇子は、扇子としての形を保つことができません。

例えば世界の主要工業製品。日本の精密部品が無ければ動きません。製品が完成しないのです。日本は正に世界の要を目指すべきだと、私は考えます。

国際政治に於いては他国と他国、地域と地域の調整役を務めることで、国際世界の舵取り役を果たせばよいのです。

日本人の1人1人が、世界の要という自覚を持てば、日本は大きく動き始めます。

我が国は、21世紀は当然のこと、22世紀23世紀においても、扇子の要とならなければなりません。

導命家へ

生命の一部である人間が、かつては母親の胸に抱かれた乳飲み子のように穏やかだった人間が、今や母なる生命を脅かすほどの破壊者と化し、翻って人間の存続をも危機に晒しているという現実。

私たちヒト種は、肥大化した「種の恐竜」として自らの重みに耐えきれず衰亡するか、あるいは地球の全生命体を巻き込んだ阿鼻叫喚の地獄絵図を描くのか。

破壊を伴う人間同士の争いは今後も続くでしょう、しかし諦めてはいけません、世界の指導者と導命家は、ヒト種の存続ではなく、生命の存続を常に念頭に置き、行動しなければならないのです。

ヒト種が宇宙へ進出することは、自種の発展だけでなく、根本的には原生生物からヒト種へと続く生命の、地球外空間への飛翔と躍動をも意味しています。

私たちヒト種の導命家が目指す方向は、地球外空間における生命の発展です。

ヒト種だけの利益を追求することでもなく、他の生命の破壊でもありません。ましてや自種の破壊は論外なのです。

私たちの子孫が目にするのは、人間の暴虐によって息絶える寸前の地球と生命か、あるいは導命家に導かれ、雄大なる宇宙へ羽ばたく力強い生命の姿でしょうか。

進歩も反省も超克もせず欲望の赴くまま破滅の道突き進むか、あるいは崇高なる理想と強い意志によって結ばれた人々が導命家となり進歩と反省と超克を成し遂げるのでしょうか。

これは**神劇における試練**です。

導命家は、神々の与えたもうた困難を乗り越えなければならないのです。

それがあなたの物語でもあるからです。

後書き

欧州の小噺を紹介します。

ある旅人が小さな村を訪れた。村の中心部では建築作業が行われ、3人の男が煉瓦を運んでいた。

旅人は男の1人に質問した。

「あなたは一体何をしていますのですか？」

「見りゃわかるだろ。煉瓦を運んでいるのさ」

旅人は別の男に同じ質問をした。

「あなたは一体何をしていますのですか？」

「俺は壁を作っているのさ」

そして三人目の男にも質問をした。

「あなたは一体何をしていますのですか？」

「私は、教会を作っているのです」

この話が言わんとすることは、同じ行為でも、視点によって意味や目的が異なってしまう、という点にあります。高次方程式のように、煉瓦を運ぶと言う一次行為は、壁を作ると言う二次行為に含まれ、教会を建設すると言う三次行為は二次行為を包含するのです。

例えば、私は本書を執筆していますが、視点を変えれば二次行為、三次行為と言った、全く違う意味や姿を持つのです。

これは人生にも言えるのではないのでしょうか。

「生きている」ことを一次行為とすれば、当然二次行為の一部となり、「生きている」事とは別の意味を持ちます。そしてその二次行為も三次に含まれるわけです。

それだけでなく、地球系DNAの被造物であるホモサピエンスとしての私を一次存在とすれば、地球系DNAは二次存在となります。その地球系DNAも高等知性の被造物であり、彼らを三次存在とすれば、結局私は地球に棲息するホモサピエンス、とは言い切れず、次元を上げれば何か別の存在でもあるわけです。

私たちが血眼になって追い求めている貨幣にしても同様でしょう。1億、100億、100兆、10京の価値も、次元を上げて眺めれば全く違う意味や姿になるわけです。お金を追いかけているつもりでも、別の視点で眺めれば、神々の作った幻影の中であくせく生きているだけかもしれません。

以前の私は「生きていること」「私という存在」「貨幣」などの意味について思い悩むこともありましたが、今では自分なりに体系立てて説明することができます。

本書を読み終えたあなたはどのようなでしょうか。自分が何者であり、何のために生きているのか、自分はなぜ存在しているのか、について答えられますか？それに納得することはできますか？

本書があなたの人生にとって新たな道標となり、人生の道として役立つならば、「導命家」を創造し、『八百万の道』を記した著者としては無上の喜びです。

現在の地球は『神劇・地球編』の終章とでもいうべき時代ですが、未だにホモサピエンスの世界は人間中心の原始的価値観が跳梁跋扈しています。しかし、本書を通して神劇に気付いた人々や目覚めた人々がそれを打ち払い、40億年続いた「地球編」に幕を下ろして、100億年続くであろう「宇宙編」の序章に舞台を移すわけです。

神劇の観点から、宇宙編の視点から、今を、世界を、そして自分をみつめ、与えられた役割に邁進し、八百万の道を共に歩みましょう。

本書を読まれた方々が、さらに力強く人生を歩まれますよう、心から祈願いたします。

最後までお読みいただき、まことに有難うございました。

八百万の道 ～導命家という生き方～

<http://p.booklog.jp/book/66536>

著者：導雲

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/doumei110/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66536>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66536>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ